

月の輪 遺跡群 III

—月の輪平遺跡(第6次調査) —

—月の輪上遺跡 (C地区) —

1982

富士宮市教育委員会

月の輪遺跡群 III

—月の輪平遺跡(第6次調査)—

—月の輪上遺跡(C地区) —

1982

富士宮市教育委員会

一月の輪遺跡群 III - 正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
4	14	として	とした	53	13	B ₂ 住居址	B ₂ 住居址
4	25	口縁	口縁	54	20	容体	容体
7	11	は前	は、前	54	24	01北神馬	01、北神馬
10	2	住居跡	住居跡	55	18	22号	20号
10	6	4本柱が	4本柱で	55	31	台付甕A ₄	台付甕A ₃
13	3	変遷	変遷	56	26	△頸	△頸
50	16	失行	先行	56	28	口縁	口縁
50	21	形能	形態	57	32	台付甕と	台付甕Aと
51	6	土器群	土器	61	20	の襖相	の様相
52	35	S D-1136	S D-1、136				
61	追加	田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」(考古学研究22-3)					

序

月の輪遺跡群は昭和45～47年に月の輪平・月の輪下・南部谷戸の各遺跡、昭和52、55年に月の輪上遺跡の発掘調査が実施されております。それらは、『月の輪遺跡群』・『月の輪遺跡群Ⅱ』としてすでに調査報告書が刊行されております。

このように発掘調査が何度となく実施される状況は一方では地域開発の進展を意味しております。それは文化財、とりわけ埋蔵文化財に対し少なからざる影響を与えつつあります。現在この埋蔵文化財の取扱いが、もっとも大きな問題となっております。開発事業等の本来の利用との調整段階ではできる限り現状保存の方針で対処しておりますが、事業内容等により現状保存できないものに対しましては発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

このたびの月の輪遺跡群の発掘調査は、工事主体者である丸工砂利販売株式会社の積極的な御理解と御協力によって、昭和56年5月24日より約2ヶ月間にわたる発掘調査をすませ、8月1日無事そのすべてを完了いたしました。ここに本報告書を刊行し、多くの方々の御批判と御指導を承るとともに、この調査に直接、間接に御指導・御協力を賜わりました地元関係者の皆様をはじめ、丸工砂利販売株式会社の各位の御理解と御協力に対しまして深く感謝と敬意を表します。

昭和57年3月

富士宮市教育長 塩川 隆司

例　　言

1. 本書は、昭和56年5月24日～8月1日までに発掘調査が実施された静岡県富士宮市星山字月の輪997～1番地他に所在する月の輪平遺跡、及び静岡県富士宮市星山字月の輪1020～2, 3番地に所在する月の輪上遺跡C地区の調査報告書である。

2. 調査主体は富士宮市教育委員会で、それは工事主体である丸工砂利販売株式会社（静岡県富士宮市沼久保398番地）からの委託を富士宮市が受けたものである。本調査及び報告書発刊に関する費用については、丸工砂利販売株式会社が負担した。

3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者　　塙川隆司（富士宮市教育委員会教育長）・風間大晃（教育次長）・諫訪重夫（社会教育課長）・塙川哲章（同課長補佐）・成瀬正光（同文化振興係長）
・渡辺孝秀（同主事）・馬飼野行雄（同技師）・渡井一信（同技師）・伊藤昌光（同学芸員）

作業員　　加納俊介・恒松慎彦・馬飼野一正・阿部富士子・深沢由美子・佐藤幸司・斎藤泰彦・望月秀行・吉野順子・田中徳代・太田智子・望月秀雄・勝亦英雄・友野勝・佐野一・深沢昭夫・渡辺み江・土井満里子・渡辺房子・青野摩耶子・野村信子・後藤美津子・辻井秀子・望月香・市川よし子・吉野ふみ子・鈴木秋子・森つや子・森とめ

協力者　　松尾昌彦（筑波大学大学院）

4. 発掘調査の担当は渡井があたり、馬飼野、伊藤が補佐した。

5. 図面及び、調査資料の整理は渡井が主体となり、湯川悦夫（神奈川県立藤沢高校教諭）、加納俊介（愛知大学講師）の協力を得た。

6. 本書の執筆は、渡井、湯川、加納が担当し、それぞれ執筆者名を文末に記した。

7. 本書の編集は渡井が、印刷・出版に関する事務は富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。

8. 発掘調査による資料はすべて富士宮市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

I. 月の輪遺跡群について	1
1. 月の輪遺跡群	1
2. 月の輪上遺跡	3
3. 月の輪平遺跡	4
II. 調査の経緯と経過	7
1. 月の輪平遺跡	7
2. 月の輪上遺跡—C地区—	9
III. 調査の結果	9
1. 造構	9
(1) 月の輪平遺跡	9
(2) 月の輪上遺跡—C地区—	20
2. 遺物	24
(1) 繩文時代	24
(2) 弥生時代末期～古墳時代初頭	24
IV. 2, 3 の問題	46
1. 月の輪平遺跡の集落構成・補正	46
2. 銅鏡について	49
3. 駿河湾と相模湾の土器	51
4. 大廓式土器補考	55

挿 図 目 次

第1図 位置図	1
第2図 月の輪遺跡群地形図	2
第3図 月の輪平遺跡全体図	5
第4図 月の輪平遺跡（第6次調査）造構全体図	8
第5図 第101号住居跡実測図	10
第6図 第102号住居跡実測図	10

第7図	第103・104号住居跡実測図	11
第8図	第105・106・130号住居跡実測図	12
第9図	第107号住居跡実測図	13
第10図	第108・109・110・115・131号住居跡実測図	14
第11図	第119・120・129号住居跡	15
第12図	第111・112・116・127・128号住居跡	16
第13図	第113・114・117・118・121・122・124号住居跡実測図	17
第14図	第125号住居跡実測	19
第15図	第126号住居跡実測図	19
第16図	ピット状遺構群実測図	20
第17図	月の輪上遺跡-C地区一溝状遺構①	21
第18図	縄文時代石器実測図	24
第19図	古墳時代遺物実測図	36
第20図	土器実測図(1)	37
第21図	土器実測図(2)	38
第22図	土器実測図(3)	39
第23図	土器実測図(4)	40
第24図	土器実測図(5)	41
第25図	土器実測図(6)	42
第26図	土器実測図(7)	43
第27図	土器実測図(8)	44
第28図	土器実測図(9)	45
第29図	土器拓影図	45
第30図	住居跡の規模	46
第31図	住居跡規模及び被火災住居跡分布図	48
第32図	静岡県内銅鐵分布図	50
第33図	野中向原遺跡出土土器実測図	59

挿表目次

第1表	住居跡計測表	23
第2表	土器個体説明(1)	25
第3表	土器個体説明(2)	26

第4表 土器個体説明(3).....	27
第5表 土器個体説明(4).....	28
第6表 土器個体説明(5).....	29
第7表 土器個体説明(6).....	30
第8表 土器個体説明(7).....	31
第9表 土器個体説明(8).....	32
第10表 土器個体説明(9).....	33
第11表 土器個体説明(10).....	34
第12表 土器個体説明(11).....	35

図版目次

- 図版第一 A. 調査前景
B. 調査全景
- 図版第2 A. 斜面上全景
B. 斜面下全景
- 図版第3 A. 第101号住居跡床面
B. 第101号住居跡掘り方
- 図版第4 A. 第102号住居跡掘り方
B. 第103・104号住居跡床面
- 図版第5 A. 第103・104号住居跡掘り方
B. 第105号住居跡
- 図版第6 A. 第106号住居跡
B. 第105・106・130号住居跡掘り方
- 図版第7 A. 第107号住居跡床面
B. 第107号住居跡掘り方
- 図版第8 A. 第108・109号住居跡床面
B. 第108号住居跡掘り方
- 図版第9 A. 第110号住居跡床面
B. 第110号住居跡掘り方
- 図版第10 A. 第111号住居跡焼土堆積状況
B. 第111号住居跡掘り方
- 図版第11 A. 第112号住居跡焼土堆積状況
B. 第113号住居跡掘り方
- 図版第12 A. 第114号住居跡掘り方

- B. 第 115 号住居跡内石組
- 図版第13 A. 第 115 号住居跡床面
B. 第 116 号住居跡床面
- 図版第14 A. 第 116・128 号住居跡掘り方
B. 第 119 号住居跡床面
- 図版第15 A. 第 120 号住居跡掘り方
B. 第 121 号住居跡掘り方
- 図版第16 A. 第 122 号住居跡床面
B. 第 122 号住居跡掘り方
- 図版第17 A. 第 123 号住居跡床面
B. 第 123 号住居跡ピット内土器出土状況
- 図版第18 A. 第 124 号住居跡掘り方
B. 第 125 号住居跡床面
- 図版第19 A. 第 125 号住居跡掘り方
B. 第 126 号住居跡床面
- 図版第20 A. 第 126 号住居跡掘り方
B. 第 127 号住居跡床面
- 図版第21 A. 第 129 号住居跡床面
B. ピット状遺構群
- 図版第22 月の輪上遺跡C地区溝状遺構01 遺物出土状況
- 図版第23 A. 月の輪上遺跡C地区溝状遺構01 出土土器
B. 月の輪上遺跡C地区溝状遺構01 出土土器
- 図版第24 出土土器(1)
- 図版第25 出土土器(2)
- 図版第26 出土土器(3)
- 図版第27 出土土器(4)
- 図版第28 出土土器(5)
- 図版第29 A. 純文時代石器、及び古墳時代遺物
B. 野中向原遺跡出土土器

I 月の輪遺跡群について

1. 月の輪遺跡群

古潤井川（星山谷）をはさんで右岸の星山丘陵と左岸の明星丘陵の2つの台地上に位置するもの、氾濫原に残った泥流からなる独立小台地や、河岸段丘上、谷底低位面などには、月の輪平遺跡・月の輪上遺跡・月の輪下遺跡・五反田遺跡・坊地上遺跡・坊地南遺跡が位置する。

このうち、月の輪上遺跡・月の輪平遺跡・月の輪下遺跡の3遺跡は、古潤井川（星山谷）左岸に位置するという共通点の他にも、距離的に近く、隣接していることや、出土遺物も時期的に非常に接近しているなどの共通点を見出すことができる。このことから3遺跡を「月の輪遺跡群」としてとらえておきたい。

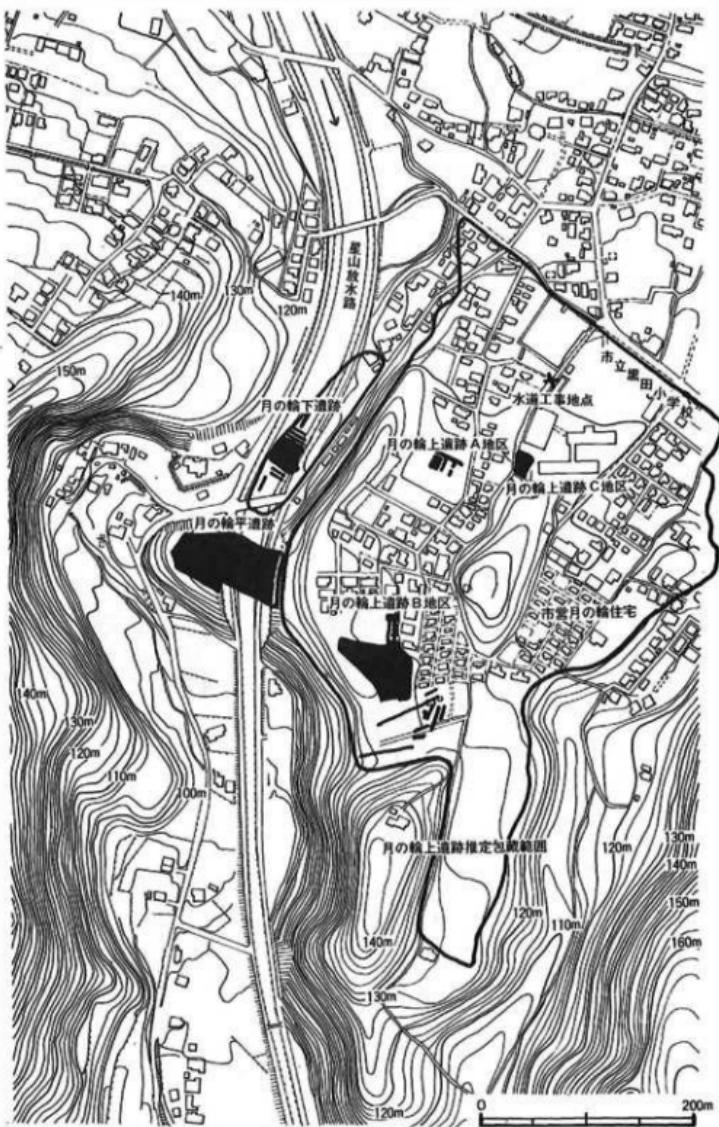
月の輪上遺跡は、星山谷北端部を一面に占め、ほぼ中央にある比高5mを測る小丘を中心に北側に向って除々に標高を減じ、約400m程で潤井川沖積地へ没する。東側は若干の窪みをもつ浸食谷に、西側は古潤井川の浸食による崖地形、南側は標高144.2mの小丘により、それぞれが区画される。包蔵推定面積約150,000m²のうち今回の調査を含む3次の調査で、約1.5%にあたる2,250m²が発掘調査されている。現状のはほとんどが宅地になっている。

月の輪平遺跡は、月の輪上遺跡の西側中央部分より西側にせり出した舌状台地である。台地は階段状に二段の平坦面が存在しており、東側の平坦面は東西80m南北50m、西側の平坦面は3mほど下り東西20m、南北50mとなっている。中間の斜面を含め包蔵面積は約6,000m²と推定される。このうちの8割強にあたる約5,000m²が6次にわたる調査で発掘調査が完了したが、残りについては星山放水路建設の際に破壊されている。現状は、星山放水路建設と土石採取により削平され、舌状台地の北側裾部から、月の輪平遺跡の西側崖下に沿った下部河岸段丘上に位置し、月の輪上遺跡により約15m、月の輪平遺跡より約10mの比高をもつ。包蔵推定面積約5,000m²のうち半分の約2,500m²は発掘調査終了後星山放水路の建設で消滅し、残りは宅地となっている。

月の輪上遺跡・月の輪平遺跡の具体的な内容は次項以下で紹介するので、ここでは月の輪下遺跡についてのみ



第1図 位置図



第2図 月の輪遺跡群地形図

簡単に説明をくわえる。

月の輪下遺跡では、古墳時代初頭の竪穴住居跡4棟・不定円形土壙1基・集石造構1基が検出されている。竪穴住居跡は一様に方形プランを呈し、「床面の二重構造」(月の輪遺跡群 参照)をもたず、柱穴が6本という特徴を有している。第1～3号竪穴住居跡は廃絶直後に住居跡プラン内に集石造構が構築されている。第4号竪穴住居跡は床面積5.1m²の小型住居跡であった。集石造構は散在するもの、敷き詰められたもの、積み重ねられたものに大別されて、遺跡全面に及ぶものであった。このように月の輪下遺跡は本遺跡群のなかでは極めて特殊であり、非実用的要素を多分に含んだ集落であった。

2. 月の輪上遺跡

月の輪上遺跡は、明星丘陵・星山谷の北端部に位置し、推定包蔵面積は約150,000m²を測る。今回の調査を含めて3度の発掘調査が実施され、それぞれA地区、B地区、C地区と命名されている。

① A地区（昭和51年度調査）古墳時代初頭一竪穴住居跡4棟一

月の輪上遺跡A地区は、月の輪上遺跡包蔵推定範囲のほぼ中央部分にあたり、竪穴住居跡4棟が検出された。4棟の竪穴住居跡の規模は月の輪平遺跡で指摘された小形住居跡に属する。その分布は、散在的であった。

② B地区（昭和55年度調査）弥生時代後期後半一竪穴住居跡18棟・溝状造構1基・掘立柱建物跡3棟一

月の輪上遺跡B地区は、遺跡包蔵推定範囲の最南端に位置する。

検出された竪穴住居は月の輪平遺跡の規模別の検討に基づけば、大型住居跡1棟、一般住居跡12棟、小竪穴造構1棟にわけられる。その分布は、大型住居跡が調査区中央に位置して、一般住居跡がそれを境いに環状となって南北2群に分別されている様相が見受けられ、重複関係、掘立柱建物跡の検出数等から2～3期の集落変遷が考えられる状況であった。形状は、胴張隅丸形が最も多く、次いで隅丸形、方形は認められなかった。「床面の二重構造」はB類が最も多く16棟中9棟を数えた。続いてC類、A類の順であった。

掘立柱建物跡3棟は調査区中央を南北に列状に検出された。形状はいずれも間口2間×奥行1間で、柱穴規模は径60×80cm、深さ50～80cmを測った。月の輪平遺跡とは性格を異にし、高床倉庫の機能を想定するに充分であった。

溝状造構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡群より北側に約30mほど離れて検出された。規模は上場巾100～110cm、下場巾20～25cmを測り、溝底は平坦面となった断面形「V」字状を呈していた。東西方面に、若干北側へ湾曲しながら約20mが検出された。壁面はかなりの傾斜で直線的に褐色ローム層まで掘り込まれて、深さは検出面より80cmほどを測った。

③ C地区（昭和56年度調査）弥生時代後期後半一溝状造構1基一

月の輪上遺跡C地区は、月の輪上遺跡包蔵推定範囲中央の小丘の西側裾部に位置する。

検出された溝状造構の規模は、上場巾100～170cm、下場巾10～40cmを測り断層はV字状であっ

た。南北方向に約20mが検出された。黒色スコリア土が埋土で、壺、甕等の遺物が溝内より出土するなど、規模、様相とも月の輪上遺跡—B地区—に非常に類似しており、連続するものである可能性を想定させるものであった。

④ 水道工事による採集資料 弥生時代後期後半。

月の輪上遺跡—C地区—の北側約80mの黒田小学校西側の水道工事中に壺、甕が検出された。採集資料は黒色スコリア土の落ち込み内に壺、甕が集中して検出された。本地点が月の輪上遺跡C地区検出の溝状造構の南北方向延長線上にあることから、C地区検出の溝状造構と同一の溝状造構である可能性をうかがわせた。

3. 月の輪平遺跡

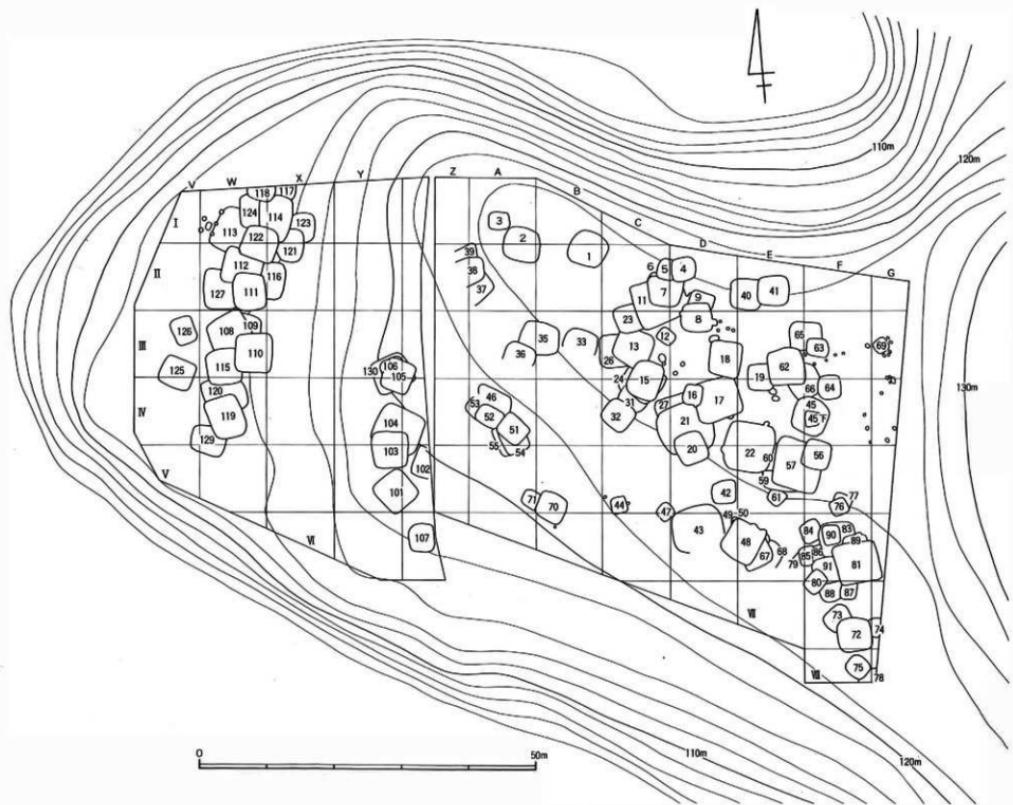
① 第1～5次調査（昭和44～47年度）弥生時代終末期～古墳時代初頭一堅穴住居跡86棟・掘立柱建物跡2棟・特殊造構2基

月の輪平遺跡第1～5次調査区は調査面積約3,000m²で、86棟の堅穴住居跡が重複しあって検出された。これらは16棟重複しあうのを最高に23地点に分かれて検出され、6時期以上の集落の変遷が推測された。それは各時期とも5～6棟からなる2～3単位集団が大型住居跡1棟を中心として軌跡であって、最終末期に大型住居跡が消滅し、住居跡規模が均等化していくことが指摘された。また、被火災住居跡の存在が確認されており、12棟検出された。そのうち第Ⅱ～Ⅲ期に属すると思われる3棟をのぞく9棟が第IV期に位置することが知れた。86棟の堅穴住居跡は、規模・付属施設・位置関係から大型住居跡6棟・一般住居跡68棟・小堅穴造構12棟の3類に区分される。これらのうち小堅穴造構は、炉、柱穴を欠き集落外縁に点在して、単位集団ではなくて集落全体と対応する状況から、居住施設としてではなくして、貯蔵・収藏施設等の機能をもつことが推測された。形状は胴張隅丸形→隅丸方形→方形と変化する傾向が、重複関係、出土土器の検討から知れた。形状を知ることのできた69棟のうち7割強が隅丸形であった。

掘立柱建物跡の形状は間口1間×奥行1間、柱穴規模は径30～50cm、深さ20～30cmを測る。しかし、月の輪上遺跡B地区に検出された中世掘立柱建物跡に類似するものであることや、周辺に焼土跡、小塔群が位置すること、柱穴内に高杯・器台・S字状縦台付甕等、限られた器種が集中して配置されていた状況などから、機能の違いを予想する指摘がなされている。（月の輪遺跡群II）

② 第6次調査（昭和56年度）弥生時代末期～古墳時代初頭一堅穴住居跡31棟、ピット群1基

月の輪平遺跡第6次調査は、調査面積が約2,000m²で31棟の堅穴住居跡が重複しあって検出された。重複している地点は4地点でとくに斜面下の地点では、13棟、8棟が重複しあっている。重複関係から5時期以上の集落の変遷が考えられる。第1～5次調査と同様に被火災住居跡が8棟確認され、そのうちの5棟は重複関係において最終末期に位置することが知れた。形状をみると31棟の堅穴住居跡のうち大型住居跡1棟をのぞいて全部が一般住居跡の範疇に入るものであり小堅穴造構の検出はみなかった。形状は、胴張隅丸形・方形と断定できるものはなく、31棟すべてが隅丸方形であった。「床面の二重構造」は、圧倒的にC類が多く全体の8割強を占めた。（渡井）



第3図 月の輪平溝跡全体図

II 調査の経緯と経過

1. 月の輪平遺跡

月の輪平遺跡は、昭和44年12月～57年9月に5次にわたり発掘調査が実施されている。今回、その調査区のすぐ西側で月の輪平遺跡を形成する舌状台地の残地として残された先端部を月の輪平遺跡第6次調査として発掘調査が実施されることになった。

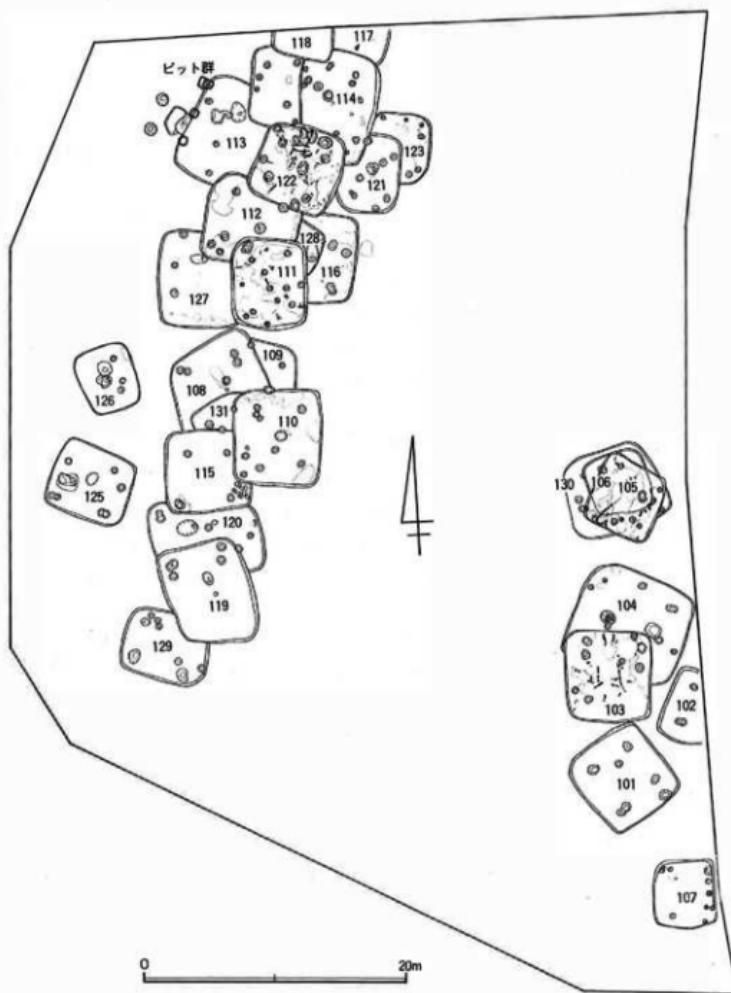
第6次調査を実施するまでの経緯は、昭和55年10月に丸工砂利販売株式会社から土石採取事業を実施するにあたっての埋蔵文化財の有無の確認調査の依頼が提出された。これをうけた富士宮市教育委員会は同年11月に確認調査を実施し、斜面をのぞくほぼ全面に遺物包含層が残存することを確認した。この結果をもとに工事計画者である丸工砂利販売株式会社と富士宮市教育委員会との間で協議を重ね、記録保存のための発掘調査を実施することで合意をみた。

発掘調査は、昭和56年5月24日～8月1日まで実施された。今回の調査区は前回までの調査区と同一面の地域とそれより3mほど低くテラス状に突き出た平坦面をもつ地域を10～15度の傾斜をもつ斜面により切断されている。発掘調査面積は、斜面上で約300m²、斜面下で約1,700m²の合計約2,000m²であった。

調査は全面の表土を除去することから開始した。この結果、調査区域北東隅から南に向って連続する傾斜面については、遺物包含層が流失しており調査不能であることが判明した。このため調査は斜面をはさんで上と下の地域で実施することにし、グリッドを設定することにした。グリッドは前回までの調査と同様に10×10m方眼で、その呼称は北から南に向っては前回までとまったく同じとし、西から東へは前回までの調査区に連続するよう西からV～Z列として前回調査区のA列とZ列が隣接するよう設定した。

表土除去作業と並行して土層堆積状況を把握するために調査区域の北辺に東西方向にトレントを設定した。前回までの調査における基本層序は、表土層、含スコリア黒色有機質土層、褐色スコリア質土層（大沢ラビリ層）、栗色土層、黒色土層、黄褐色ローム質土層でこれが本地域における一般的な土層堆積状況であると認められているが、斜面上の前回までの調査区から統く部分については栗色土層より上層については流失しているにせよ、基本的層序は同様であると観察された。しかし、斜面下の地域については、基本的層序が若干異なるものであった。栗色土層以下は、前回調査と同様であるが、含スコリア黒色有機質土層と褐色スコリア質土層に該当する土層は斜面上からの土砂の流失と混入による土層となっている。層序は、表土層、含褐色スコリア黒色土層、栗色ブロック含有黒褐色スコリア質土層、黒色土層、黄褐色ローム質土層となっている。遺構確認面は、原則的には含褐色スコリア黒色土層、栗色ブロック含有黒褐色スコリア質土層であるが、これらの土層は2次堆積土であり、遺構内覆土と極めて類似するものであった。このため遺構の検出は困難をきたした。このためサブトレントによる床面追求を交えながら遺構のプランを確認した。

遺構は検出順に遺構番号をつけることにしたが、前回までに住居跡86棟、掘立柱建物跡2棟などが検出されており、本来、つづき番号として表わすべきであるが、便宜上、住居跡は101番から使



第4図 月の輪平遺跡(第6次調査)遺構全体図

用することにした。

調査区域の斜面上の地域では、合計8棟の住居跡が確認された。このうち3棟は単独に存在するもので、残りの5棟については、2箇所で重複関係が認められた。床面は比較的堅固のものと、軟弱なものとにわかつた。柱穴の検出には困難をきたし、掘り方において確認される例が多かった。

斜面下の地域では、住居跡23棟、ピット状遺構群1基を確認した。住居跡は単独で確認された2棟のほか、8棟が重複し合うグループと、13棟が重複し合うグループが2箇所確認された。多数の住居跡が重複していることから床面において柱穴の検出は困難で、掘り方において確認される場合が多くあった。床面は大半の竪穴住居跡が、炉を有する比較的堅固な貼床を有していたことから、確認するのは容易であった。

ピット群は、調査区域西北端に住居跡と重複関係をもって確認された。掘立柱建物跡の可能性を含め調査したが判明しなかった。

昭和56年8月1日に発掘調査を完了した。

2. 月の輪上遺跡—C地区—

月の輪上遺跡—C地区—の発掘調査は、市立黒田小学校校舎増築工事に先立ち、昭和56年9月1日～9月6日までの6日間に実施された。調査対象面積は約300m²であったが約半分ほどは攪乱されており、南北方向に細長い区画で発掘調査面積は約150m²であった。

調査は表土を除去し、大沢ラビリ層を精査することから開始した。その結果、調査区域を南北に貫く格好で溝状遺構が確認された。これは月の輪上—B地区—において確認されたものと同様のものらしく、溝の構造、埋土の状況などは、ほとんど違わないものであった。遺物の出土も同様で、溝内の溝底より10～20cmに浮いた状況で確認された。遺物は土器がすべてであったが、壺・甕に限られるものであった。

上記のとおり、月の輪平遺跡は昭和56年8月1日、月の輪上遺跡—C地区—は昭和56年9月6日に発掘調査を完了し、以後報告書作成作業を継続し、昭和57年3月31日に本書を刊行した。(渡井)

III 調査の結果

1. 遺構

(1) 月の輪平遺跡

月の輪平遺跡第6次調査で検出された遺構は古墳時代初頭の竪穴住居跡31棟、ピット状遺構群1基であった。なお、住居跡計測表に記述される竪穴住居跡の床面構造A・B・C類は月の輪遺跡群I・IIと同様とし、A類は床面プランの外縁部に巾70～80cmほどの周濠状掘り込みをもって中央部を方台状に高く残す。B類は床面プランの外縁部を平坦に残し、その内側より周濠状掘り込みをA類同様にもつ。C類は床面プラン全域を舟底状ないしは平坦な掘り込みをもつものである。また、住居跡の遺構番号であるが、混乱をさけるため、第1～5次調査につづく番号を使用せず、第101番から使用することにした。

第101号住居跡（第5図、図版第3）

第101号住居跡は、調査区東南端第107号住居跡の約3m北側に位置し、東北側において第102・103号住居跡に隣接する。重複関係は有せず単独で存在する。床面は比較的軟弱であるが、それでも数cmの貼床が認められ、炉は中央やや西よりに60×80cmの規模で、炉石4個に囲まれて検出された。焼土は、西よりの地点で20×30cm程の規模であった。他に焼土が中央から北にかけて3箇所で確認されている。柱穴は4本柱があったが、南西隅の柱穴に副柱と推定できるピットが検出された。

第102号住居跡（第6図、
図版第4）

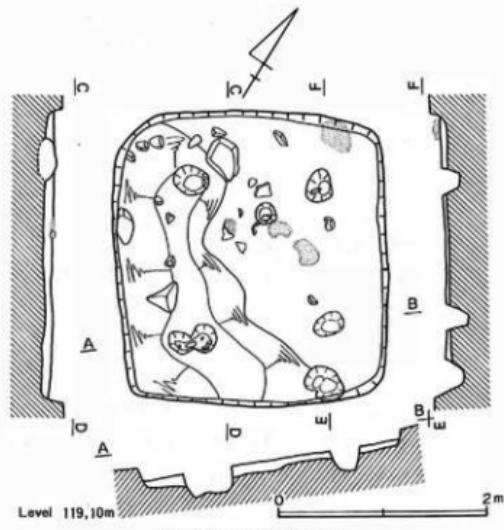
調査区東側で第101・103・104号にはさまれて隣接する。住居跡東半約 $\frac{1}{2}$ は、星山放水路建設の際に削失されてしまっている。この影響で残存する部分についても、床面以上は攢乱されており、掘り方面での検出となった。柱穴は2本で規模40cm、深さ35cmを測った。南側の柱穴は副柱と推定できるピットを伴っている。遺物は皆無に等しかった。

第103・104号住居跡（第7
図、図版第4・5）

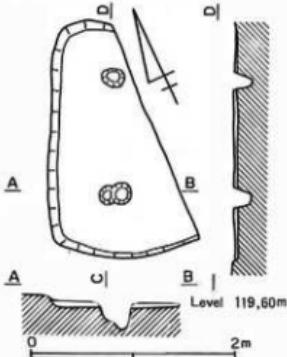
本調査区域は、斜面により東側と西側に隔されているが、第103・104号住居跡は斜面東側、調査区域東端部に位置し、東側に第102号住居跡が隣接する。新（←）旧関係は第103 ← 104であった。

第103号住居跡の床面は比較的堅固な貼床がなされていたが、本住居跡ほぼ全面にゴボウ穴が数十cmおきに入れられている状況であったため部分的に確認されるにとどまった。また炉についてもこのゴボウ穴により確認することができなかつた。しかし、焼土は中央から北よりにかけてほぼ全面に多量の炭化材・焼土等が検出され、火災を被ったと思われる状況であった。北辺壁際で壺10306が床面上で検出された。

第104号住居跡は、約 $\frac{1}{3}$ を第103号住居跡により削取され



第5図 第101号住居跡



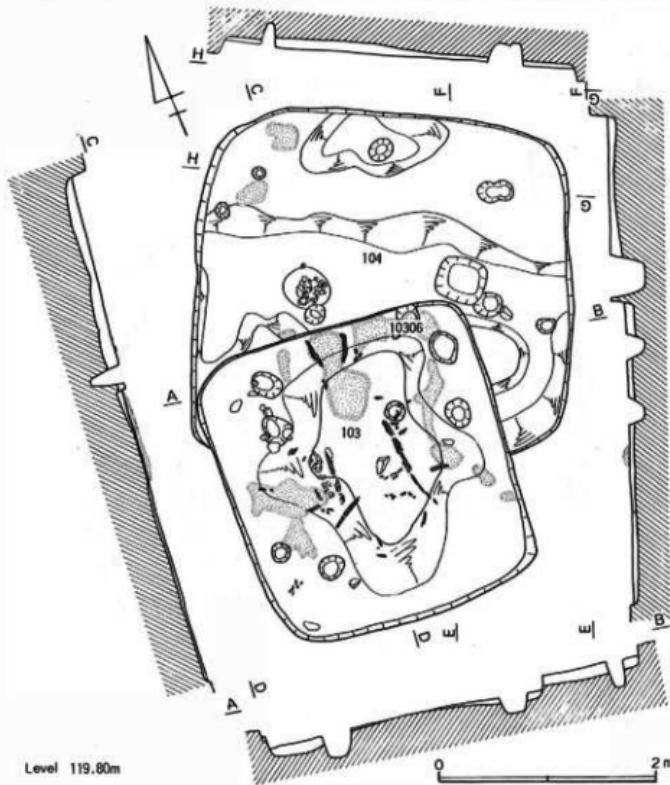
第6図 第102号住居跡

ている。床面積は約45m²（推定）を測り、本調査区内発見の住居跡の中で最大のものであった。面積的にいえば、『大型住居跡』の条件を満たすものである。床面は、やや堅固といえる状況の貼床を有していた。柱穴は4本であったがその他の柱穴状ピット5本と80×90cmの方形のピット1基を検出した。方形ピットは、第103号住居跡の貯蔵穴といえる状況が推定できた。また中央やや西よりの箇所で掘り方を有する集石遺構を検出した。炉はゴボウ穴の搅乱により確認されなかった。

第105・106・130号住居跡（第8図、図版第5・6）

調査区域の斜面の東側部分北端に位置する。互いに重複関係をもち新（←）旧関係は130→106→105であった。

第105号住居跡の床面は比較的堅固で全域に多量の炭化材・炭化カヤ・焼土等を載せている状況であった。柱穴は、位置的にはっきり柱穴といえるのは2本であった。床面には、壺・壺などが検



第7図 第103・104号住居跡

出された。

第106号住居跡の床面は第105号住居跡の掘り方による破壊をまぬがれたためほぼ全域で堅固な状況で確認された。柱穴は2本確認された。

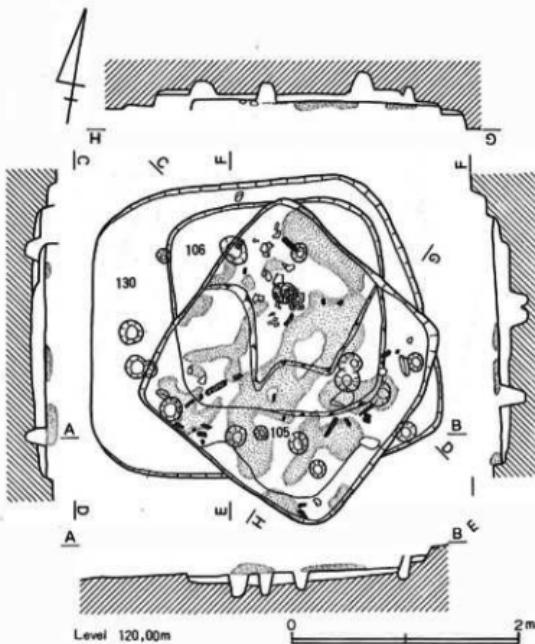
第130号住居跡は、第105号住居跡に北辺、東辺の一部を切断されて、また第105号住居跡を完全に内包するかのように位置する。その西側は斜面になっているため床面・掘り方が1~2cm残存する程度であった。床面構造は床面積の6割以上を第105、106号住居跡に削取されているため確認することができない状況であった。柱穴は2本検出された。

第107号住居跡(第9図、図版第7)

第107号住居跡は第101号住居跡の南約3mに位置し、本調査区域の最南端に位置する。重複関係を有せず単独で存在し、床面は比較的堅固な貼床がなされていた。柱穴は位置的にはっきりと柱穴といえるのは3本であった。西北隅壁際の床面上で壺・甕が出土している。

第108・109・110・115・119・120・129・131号住居跡(第10・11図、図版第8・9・12~15・21)

調査区域内斜面下の中央より南側において8棟重複する住居跡群である。その北側には13棟重複する住居跡群に隣接する。そのうち最も接近する第108号住居跡と第111号住居跡との距離は數十



第8図 第105・106・130号住居跡

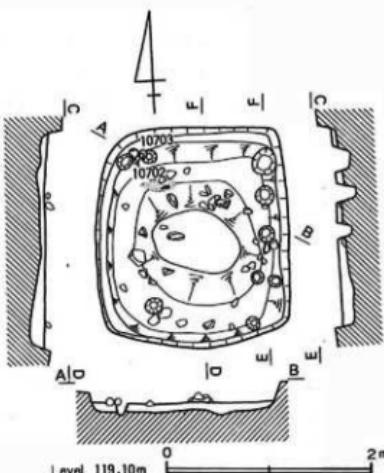
cmであった。新(→)旧関係は、住居跡計測表において記述したが重複関係から少なくとも4~5時期以上の集落の変遷が推測される。住居跡の規模は月の輪遺跡群Ⅰ・Ⅱの住居跡の規模の検討によれば、いずれも一般住居跡の範疇に入るものである。

第108号住居跡は住居跡4棟と重複し、床面は堅固な貼床であった。炉は2箇所で確認され、北寄りの炉は、40~50cmの円形の掘り方をもって、焼土が北側1mにまで及んでいる。南側の炉は、径20cmを測り、焼土は硬く厚かった。掘り方面において第131号住居跡を確認している。第109号住居跡は、第108・110号住居跡により床面の半分以上は削取されているが非常に堅固な貼床を有していた。第110号住居跡は被火災住居で堅固な貼床面上からは、甕・壺・銅鏡・ガラス玉などが出土している。第115号住居跡は、比較的堅固な貼床を有していた。東辺南西隅付近で石組造構が確認された。石組の規模は、120×90cmで15~40cmの礫13個によって構成されている。この造構の性格等は不明であるが、床面より浮いている状況で礫が確認されているところから住居跡との関わりはないと思われる。第119号住居跡の床面は軟弱であった。炉は2箇所で確認された。中央部の炉は径25cmを測って、焼土は硬く厚かった。中央部北寄りに確認された炉は50×80cmほどの楕円形掘り方をもって、四角柱礫2個が炉石として使用されていた。第120号住居跡の床面は堅固であった。炉は2箇所で確認され、中央部の炉は径30cmを測り、焼土は硬く厚かった。西寄りに確認された炉は90×120cmの楕円形掘り方をもって30cm程度の三角形の平坦な礫を炉石として使用していた。第129号住居跡は、調査区域斜面西側の最南端に位置する。床面はやや軟弱であった。南東隅の柱穴状ピットから丹塗りの高杯部が検出された。また、本住居跡掘り方面検出中に中央から南西側に300×180cmの規模で貼床らしきものを検出した。掘り方は認められなかつたが住居跡であったのかもしれない。第131号住居跡は第108号住居跡掘り方面検出時に発見されたもので、第108号住居跡より古いものであることが推定される。

第111・112・113・114・116・117・118・121・122・123・124・127・128号住居跡 (第12・13図、図版第10~18・20)

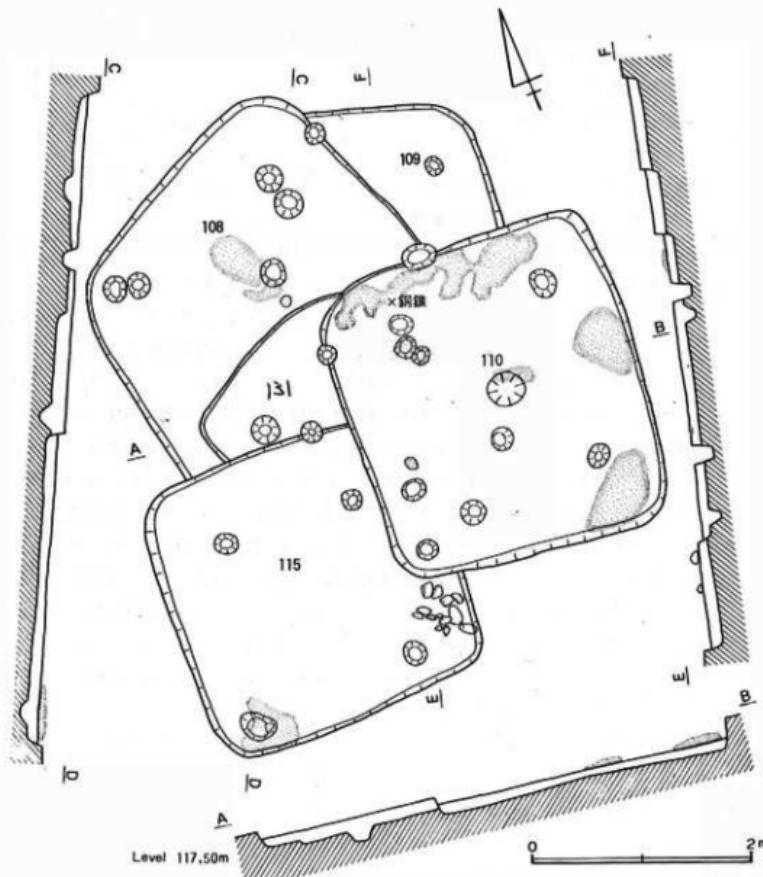
調査区域内斜面下の中央より南側において13棟重複する住居跡群である。その南側には8棟重複する住居跡群に隣接する。重複関係から5時期以上の集落の変遷が考えられる。住居跡の規模は、南側の住居跡群同様いずれも一般住居跡であった。

第111号住居跡の床面は軟弱な貼床であった。床面から掘り方面まで40cmを測る最も深い例で



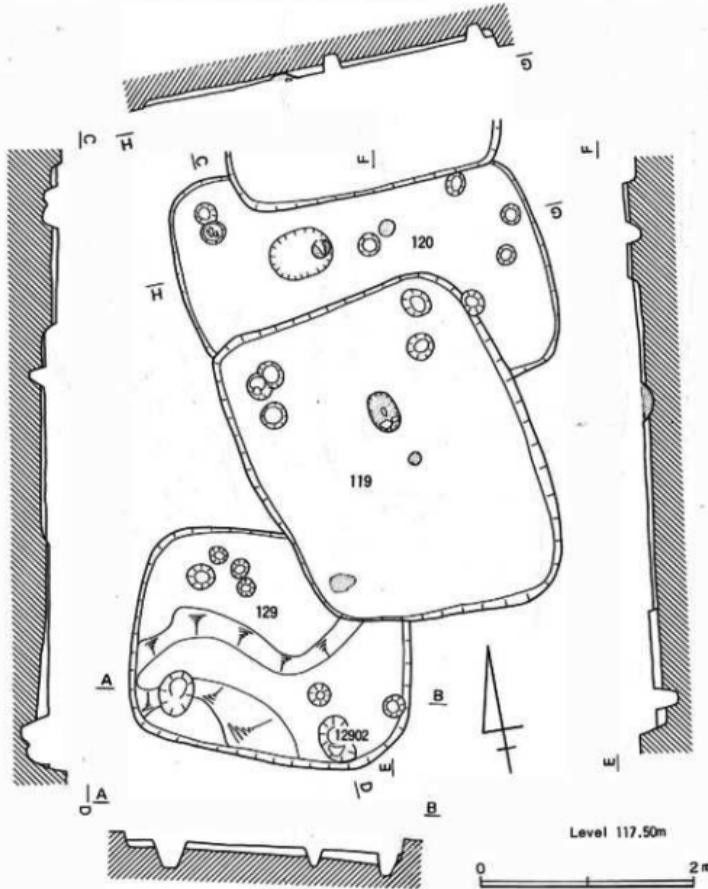
第9図 第107号住居跡

あった。被火災住居で全面に炭火材・炭火カヤ・焼土が散乱していた。床面上から、全長7cm程の小型の砥石を検出した。第112号住居跡の床面は比較的堅固な貼床が部分的に確認された。焼土がかなりの量確認されており被火災住居である可能性が強い。第113号住居跡の床面はやや軟弱な貼床であった。中央部・北西部において地山礫が床面にはほぼ同一レベルで平坦に露出していた。また西壁では中央部に地山礫を利用する構造を有していた。第114号住居跡は、貼床が途切れるほど軟弱な床面であった。第106号住居跡の床面は、比較的堅固な貼床であった。炉は2箇所で確認された。南側の炉は30×40cmの楕円を呈し、焼土は硬く厚かった。北側の炉は70×120cmの規模の楕円形掘

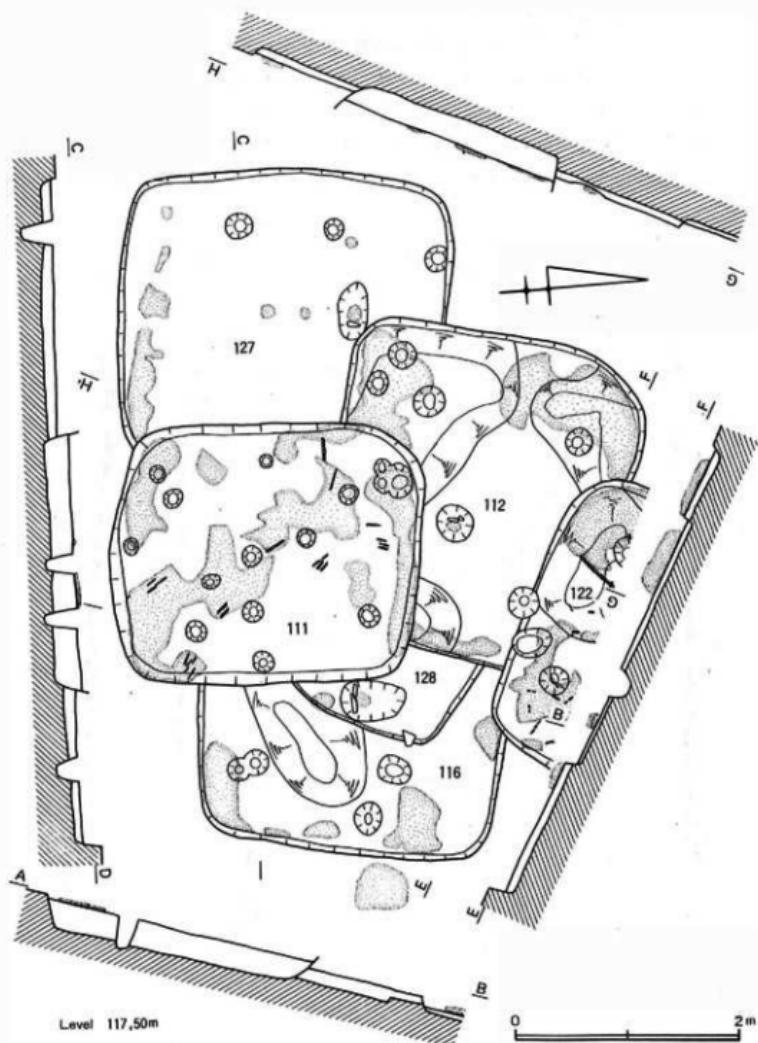


第10図 第106・109・110・115・131号住居跡

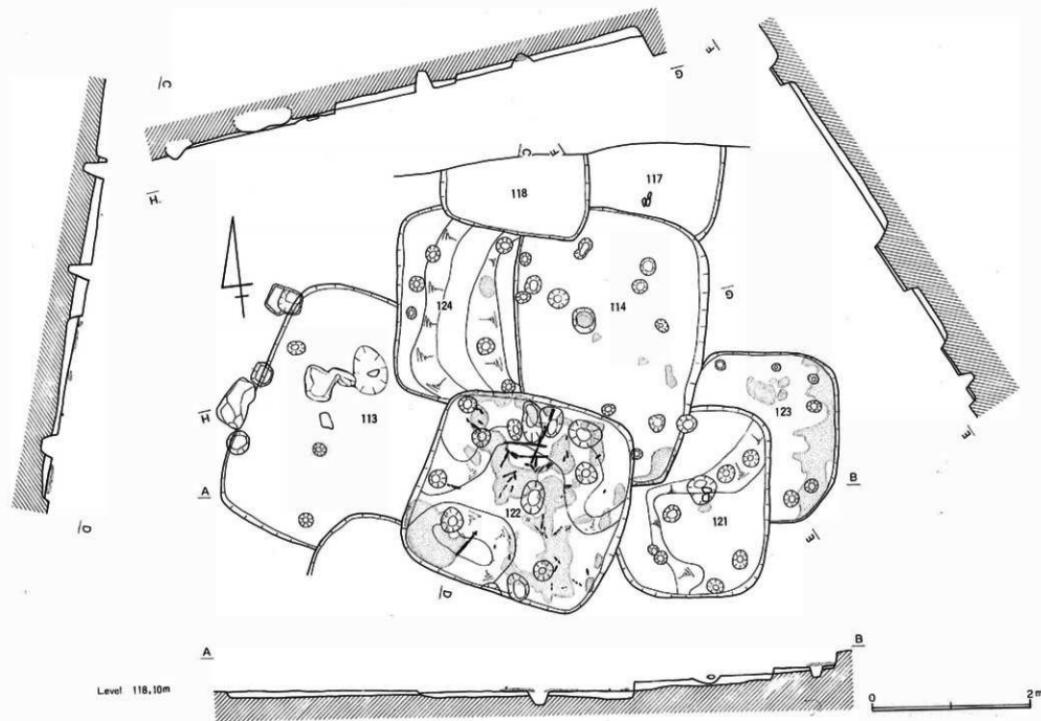
り方を有し、炉石2個を伴い検出された。第117号住居跡は、本調査区最北端に位置する。床面は部分的に貼床がみられたがはっきりしなかった。第118号住居跡の床面はかなり上部にあったらしく流失によって確認できなかった。掘り方により住居跡と断定した。第121号住居跡の床面は部分的にはあるが比較的堅固な貼床であった。第122号住居跡は軟弱な床面上のほぼ全面にわたり炭化物・炭化カヤ・焼土等が散乱していた。被火災住居である。第123号住居跡の床面は軟弱で、ほぼ全面に焼土が床面を被っていた。東南隅の柱穴状ピット内より小型のS字状口縁台付甕を検出した。第124号住居跡は部分的に認められる比較的堅固な貼床を有している。第127号住居跡の床面



第11図 第119・120・129号住居跡



第12図 第111・112・116・127・128号住居跡



第13圖 第113・114・117・118・121・122・124号性层跡

は比較的堅固な貼床であった。炉は2箇所で確認された。中央の炉は、20cmほどの円形で焼土は硬く厚かった。北側の炉は約50×100cmの楕円形の掘り方をもち、炉石1個を伴い検出した。第128号住居跡は、第116号住居跡掘り方面検出時に発見されたもので、掘り方以外確認されなかった。

第125号住居跡（第14図 図版第18・19）

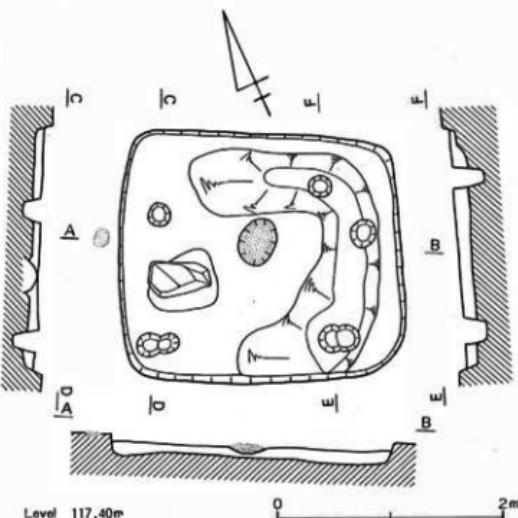
第115号住居跡の西側約2m、第126号住居跡の南約2mに位置する。重複関係は有せず単独で存在する。床面は比較的軟弱な貼床で地山疊の露出がみられた。

第126号住居跡（第15図 図版第19、20）

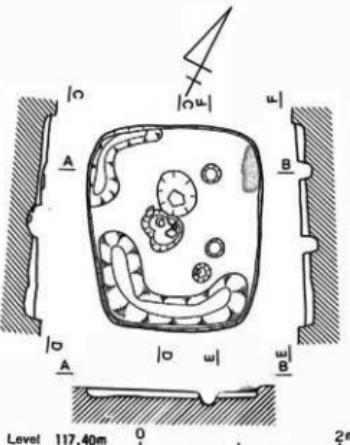
第108号住居跡の西側約2m、第125号住居跡の北側約2mに位置し、重複関係は有せず単独で存在する。床面は比較的堅固な貼床である。

ピット状遺構群（第16図、図版第21）

掘立柱建物跡や槽列跡などの遺構としての可能性をもつもので、東列3基、西列2基のピットが確認された。東列の3基は第113号住居跡の西壁に重複している。新旧関係は第113号住居跡がより古いものであった。東列は60~70cmの円形、若しくは隅丸方形で30~50cmの深さを測り、柱間は180cm、200cmであった。西列は2基で、70~80cmの円形で10~20cmほどの深さを有していた。東列とは明らかに形状が異なるものであった。遺物の出土もなく、性格その他不明な点が多かった。



第14図 第125号住居跡



第15図 第126号住居跡

② 月の輪上遺跡—C地区—

今回の調査では溝状遺構のみが検出された。

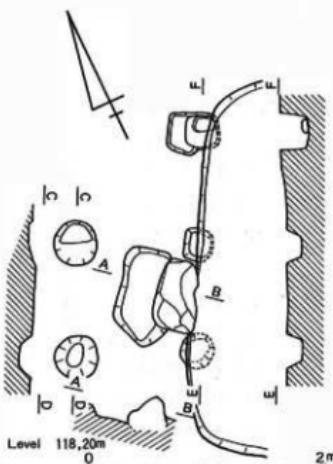
溝状遺構01（第17図、図版第22・23）

規模は上場巾100～170cm、下場巾10～40cmを測り、溝底は平坦となった断面形「V」字状を呈していた。調査区域をほぼ南北に貫いており、南北調査区外に延長することは確実であった。深さは80～100cmほど測り、壁面はかなりの傾斜で直線的に褐色ローム層まで掘り込まれていた。月の輪上遺跡—B地区—における溝状遺構と同様に埋土は黒色スコリア土が主体で、下層にむかうにしたがって水分を含んで湿っぽくなる。最下層には薄く褐色ブロック土を混えた黒色スコリア混入土が堆積していた。埋土として砂質土はまったく確認されなかった。

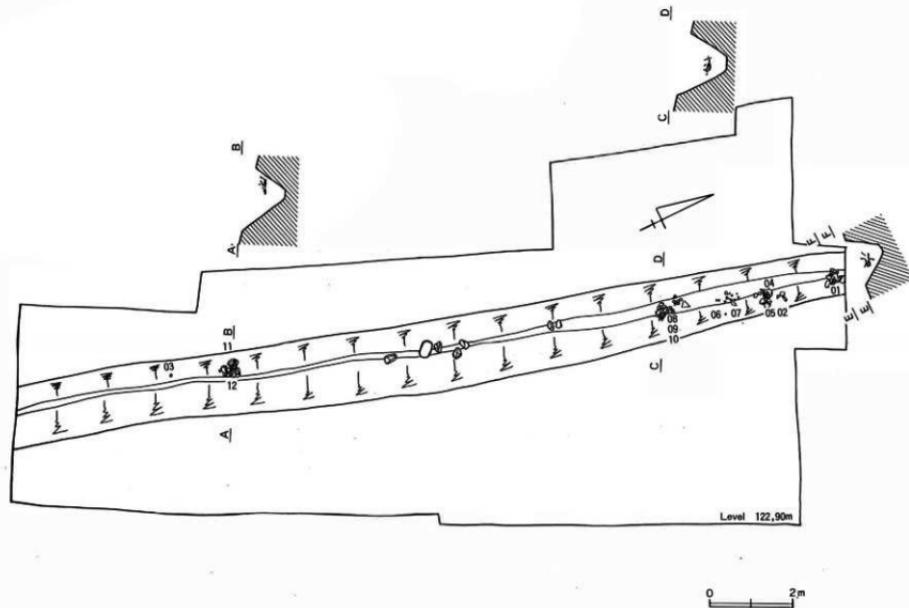
遺物は土器がすべてで壺・甕に限られ、すべてが溝底より30～60cm浮いた状況で検出された。

以上確認された溝状遺構は月の輪上遺跡—B地区

—とほぼ同様のもので、連続するものである可能性を強め、それは本地区北側の水道工事による資料採集地点にまで連続する可能性を広げたといえる。（渡井）



第16図 ピット状遺構群



第17図 月の輪上C地区 溝状遺構01

住居跡 番号	プラン(イ) 標定				ピット(イ) 施工				地 士		床 面 の 高 度 間 係 (一~四) 二重構造 (一不明)	
	長様×短様 (m)	床面積 (m ²)	平面形	長軸方位	既存状況	柱穴数	柱穴規格	柱穴深さ cm	木 筋	その他		
第 101 号住居跡	364×530	29.9	楕丸方形	N-32°-W	完存	4 (II)	50~70	40~50	1	有	有	C
102 ×	452×—	—	—	—	約 16	2 (II)	40	35	—	—	—	C
103 ×	552×524	29.4	楕丸方形	N-3°-E	完存	3	50~60	40~50	4	有	有	A 103~104
104 ×	702×645	45.5	楕丸方形	N-64°-W	%	4 (II)	40~60	40	5	有	有	C 103~104
105 ×	442×439	19.0	楕丸方形	N-26°-E	完存	3	30~40	40	4	有	有	C 105~106~130
106 ×	377×376	14.2	楕丸方形	N-16°-E	%	2	40~60	30~50	—	—	—	C 105~106~130
107 ×	422×369	16.4	楕丸方形	N-1°-E	完存	3	30~50	30~40	6	有	—	B
108 ×	650×—	—	(楕丸方形)	—	%~%	4 (II)	40~50	30	2	有	有	C 110~115~108~109~131
109 ×	—	—	—	—	—	3	40~60	40~50	2	—	—	C 110~108~109
110 ×	588×532	31.3	楕丸方形	N-5°-E	完存	4 (II)	40~60	40	3	有	有	C 110~115~108~109~131
111 ×	560×466	26.1	楕丸方形	N-6°-E	完存	4	30~40	40~50	7	有	有	C 111~112~127 115~116~126
112 ×	544×—	—	—	—	—	3	50~60	50	5	有	有	C 122~112~133 111~116~126
113 ×	624×—	—	—	—	—	—	—	—	3	有	有	C 122~112~113
114 ×	(686)×494 (38.3)	—	楕丸長方形	N-11°-E	%	3	40~50	30~40	5	有	有	C 118~114~137 122~114~121~123 124~113
115 ×	536×(382) (28.5)	—	楕丸方形	N-1°-E	%	4	40~60	40	—	有	有	C 110~115~108~109~131
116 ×	560×—	—	(楕丸方形)	—	%	3 (II)	40~60	40	2	有	有	C 122~112~113 111~116~126
117 ×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	有	—	C 118~114~117
118 ×	376×—	—	(楕丸方形)	—	(%)	—	—	—	—	—	—	118~114~117 124
119 ×	644×536	34.5	楕丸長方形	N-9°-W	完存	2	50~60	40	1	有	有	C 119~120 129
120 ×	700×(640) (30.8)	—	楕丸長方形	N-84°-W	%	3 (II)	40~50	30~40	4	有	—	C 119~130
121 ×	494×(490) (19.4)	—	楕丸長方形	N-6°-E	%	4	30~50	40	4	有	—	C 122~114~121~123
122 ×	524×509	25.6	楕丸方形	N-63°-W	完存	4	50~60	40~50	5	有	A	C 122~114~121~123 114~121~133 122~116
123 ×	432×—	—	(楕丸方形)	—	%	3	40~50	30~40	4	有	—	C 114~121~123
124 ×	—	—	(楕丸方形)	—	約 16	2	40~60	30~60	7	有	—	C 118~114~124~113 122~
125 ×	496×480	23.8	楕丸方形	N-65°-W	完存	4 (II)	40	30	1	有	—	B
126 ×	468×532	14.4	楕丸長方形	N-23°-W	完存	2	30~40	40~50	1	有	有	A
127 ×	592×—	—	—	—	%	—	50~60	60	3	有	有	C 111~112~127
128 ×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	111~112~116~126
129 ×	540×420	22.7	楕丸長方形	N-72°-W	%	3	50~90	50	6	—	—	C 119~129
130 ×	584×576	33.6	楕丸方形	N-18°-W	%	2	40	40	5	—	—	C 105~106~130
131 ×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	110~115~108~131

第 1 表 住居跡計測表

2. 遺物

(1) 繩文時代

月の輪平遺跡第6次調査からは、若干の縄文時代石器を得た。

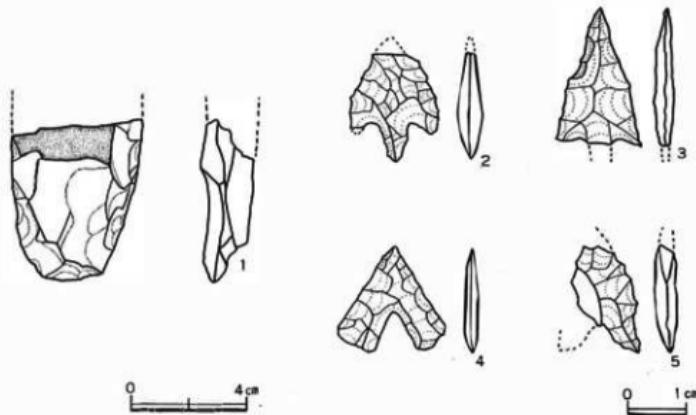
打製石斧1は、第104号住居跡掘り方内より検出された。短冊形を呈して基部を欠損している。片面に自然面が残る。残存長5.5cm、残存巾4.4cm、厚さ1.8cm、重さ52gを測る。安山岩系の石材を用いている。

打製石鎌2は、第103・104号住居跡埋土より検出された。黒耀石製の凹基有茎鎌で、逆刺が角をなし、茎の抉りが深く明瞭である。先端部と片側逆刺を欠く。残存長1.8cm、残存巾1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.95gを測る。

打製石鎌3は、第105号住居跡埋土より検出された。頁岩系の石材を用いた有茎鎌で、逆刺が角をなす。茎部を欠く。残存長2.3cm、残存巾1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.90gを測る。

打製石鎌4は、第110号住居跡埋土より検出された。石材はチャートで凹基無茎鎌である。抉りが深い環形鎌で縄文時代早期的色彩をもつものである。長さ1.8cm、巾1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.35gを測る。

打製石鎌5は、第129号住居跡埋土より検出された。黒耀石製の凹基無茎鎌である。先端部と片側脚部を欠く。残存長1.8cm、残存巾1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.60gを測る。



第18図 縄文時代石器実測図

(2) 弥生時代末期～古墳時代初頭

本調査によって得られた弥生時代末期～古墳時代初頭の遺物は、壺、甕、高杯、器台、小型丸底等の土器類と、第110号住居跡床面より検出された銅鏡と同じく第110号住居跡出土のガラス玉、第111号住居跡床面より検出された小型の砥石であった。

① 土 器 類 10101～0017 月の輪上遺跡 uc 0101～uc 0112 月の輪上遺跡

() 現存

土器 番号	器 形	口径 器高 底径 cm	特 徴	調 整 + 文 様	備 考
10101	— 甕 D	18.0 (4.9) —	粘土 あまり砂粒を混じえない 焼成 あまり良くない 色調 〈器表〉淡青褐色 〈器底〉淡青灰色	外面 肌あれ、タテのハケメ痕あり (13本/1cm) 内面 肌あれ	1/5存
10102	— 甕 C	15.0 (5.1) —	粘土 細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成 あまり良くない 色調 黄褐色~棕褐色	外面 肌あれ、口縁部タテハケメ、胴部ヨコハケメらしい (11本/1cm) 内面 肌あれ、胴部にヨコハケメ痕あり (6本/1cm)	1/6存
10103	甕 E	15.8 (2.7) —	粘土 細かな砂粒を混じえる 焼成 普通 色調 (暗) 淡褐色	外面 タテハケメ (10本/1cm) の後、口縁部ヨコナデ、口縁部粗く雜なタテミガキ 内面 ヨコナデ	1/5存 床面
10104	甕 —	— (9.0) 7.5	粘土 目につくような 植物をあまり混じえない 焼成 やや不良 色調 〈器表〉淡黄褐色 〈器底〉淡青灰色	外面 肌あれ、胴部外位ヨコミガキか?、底部タテハケメ (8本/1cm) 内面 肌あれ、底部ヨコハケメ	5/6存 床面 -
10105	甕 —	—	粘土 細かな砂粒をかなり多く混じえる (秋サビ色の粒子あり) 焼成 普通 色調 (淡) 茶褐色	外面 タテハケメ (10本/1cm) の後タテミガキ、底面木薙痕 内面 右下りのナメハケメ	底部喉部1/4存
10106	甕 —	— (1.9) 8.8	粘土 2~3mmの大ものを含めて 多量に砂粒を混じえる 焼成 普通 色調 黄褐色	外面 ミガキか?、底面木薙痕 内面 肌あれ	略完存 床面
10107	高杯 A	— (8.0)	粘土 2mmの大ものを含めて細かめの砂粒をかなり混じえる 焼成 良好 色調 暗黄褐色~暗棕褐色	外面 細かく丁寧なタテミガキ 内面 細かく丁寧なタテミガキ	杯部底部完存 他に杯部口縁部の 小片!
10108	高杯 A	— (7.9) 10.0	粘土 2mmの大かなり大きめの砂粒まで混じえる 焼成 普通 色調 〈外面〉淡青褐色 〈内面〉杯部青褐色、脚部 暗黄褐色	外面 杯部口縁部タテハケメの後タテミガキ、底部ヨコハケメの後ヨコミガキか?、脚部タテハケメ (13本/1cm) の後タテミガキ 内面 杯部一方向ミガキ、脚部ヨコハケメ (6本/1cm)	脚部喉部1/3存
10109	小 型 土 器	7.3 4.8 3.2	粘土 長石が多く、他に石英、金 雲母等を含む 焼成 やや不良 色調 暗茶褐色	外面 オサエの後口縁部のみナデ 内面 オサエの後口縁部のみナデ	略完形 外面の一部にスス付着
10301	台 付 甕 A	16.7 (20.4) —	粘土 微細な長石、石英等が多く 雲母等を含む 焼成 良好 色調 (暗) 棕褐色	外面 口縁部ヨコナデ④、胴部中位ヨコケズリ①の 後、上位左下りのナメハケメ③→中位タテ ハケメ④→下位右下りのナメハケメ③ (6 本/1cm) 内面 口縁部ヨコナデ、胴部オサエの後ナデ	略完存 スス付着 二次加熱あり

第2表 土器種別説明 (1)

土器番号	器形	口径 器高 底径 (cm)	特徴	調査文様	備考
10302	台付甕 A	15.8 19.75	胎土 磨きな金雲母や長石、石英等を多く含む 焼成 良好 — 色調 (暗) 黄褐色～(暗) 棕褐色	外面 口縁部ヨコナデ②、胴部上位左下りのナナメハケメ③ 中位右下りのナナメハケメ④→下位右下りのナナメハケメ⑤ (5～6本/1cm) 内面 口縁部ヨコナデ、胴部オサエの後ナデ	底部1／2存 スス付着あり
10303	台付甕 A	— (6.7) 9.5	胎土 粗かな石英、長石等が多く 金雲母はやや少ない 焼成 良好 色調 (暗) 茶褐色	外面 右下りのナナメハケメ (10本/1cm) 内面 オサエの後ナデ	7/8存
10304	台付甕 A	— (2.6) 10.4	胎土 砂粒が多く金雲母は少ない 焼成 良好 色調 暗緑褐色	外面 ナデ 内面 肌あれ	脚部下部1/3存 床面
10305	— 甕 D	20.0 (3.9)	胎土 2～3mmのものを含めて、 砂粒をかなり多く混じえる。 焼成 普通 色調 《器表》 淡黄褐色 《器裏》 黒褐色	外面 口唇部剥み目、口縁部タテハケメ 内面 口縁部ヨコハケメー ヨコナデ	口縁部1/8存 他に胴部剥片あり 床面 スス付着 二次加熱あり
10306	甕 -	12.1 15.0 5.2	胎土 磨きな砂粒のみを混じえる かなり粗選されたもの やや良好 色調 《外面》 茶褐色 《内面》 暗褐色	外面 口縁部ヨコハケメ②→胴部タテハケメ① (6本/1cm) の後口縁部ヨコナデ③、胴部細かく丁寧なタテミガキ④、ヨコハケメ痕あり 内面 口縁部ヨコナデの後一部ヨコミガキ、胴部上位ヨコハケメの後タテミガキ、下位ヨコナデ④→中位ヨコハケメ① (11本/1cm) 、下位肌あれ	略定形 床面 二次加熱あり スス付着
10401	台付甕 A	— (4.6) 9.2	胎土 長石、石英等を多く金雲母は少ない 焼成 良好 色調 暗緑褐色～暗棕褐色	外面 右下りのナナメハケメ (6本/1cm) 内面 ナデ	1/2存
10403	高杯 -	21.5 (5.4)	胎土 目立つ灰雜物をあまり混じ えない (淡サビ色の粒子あり) 焼成 良好 色調 暗黃褐色～暗棕褐色	外面 やや難な細かいナナメミガキ 内面 口唇部ナデ、口縁部やや難な細かいナナメミガキ	1/3存 他に杯部小片9あり 床面 スス一部付着
10404	小型土器	6.4 4.8 3.2	胎土 粗かな砂粒をいくらか混じ える 焼成 良好 色調 《器表》 暗赤褐色 《器裏》 淡緑褐色	外面 口縁部ヨコナデ、胴部細かく丁寧なヨコミガキ 内面 口縁部→胴部上位細かく丁寧なヨコミガキ、下位肌あれ	胴部1/3 口縁部1/8存 J-3・4号内 J-4号内 特製土器
10501	台付甕 A	15.4 (13.4)	胎土 粗かな金雲母の他、長石、 石英等を混じる 焼成 良好 色調 (暗) 黄褐色	外面 口縁部ヨコナデ②、胴部上位ヨコケズリ①の後、上位左下りのナナメハケメ③→中位右下りのナナメハケメ (阿囬か垂ねる) ④ (5本/1cm) 内面 口縁部ヨコナデ、胴部オサエとナデ	口縁部略完存

第3表 土器個体説明 (2)

土器 番号	器 器	種 形	口徑 器高 底径 cm	特 徴	調 整 文 様	備 考
10502	台 盤	台 付 A	17.0 (17.3) —	胎土 粗かな長石、石英等が多く、金雲母はやや少ない 焼成 良好 色調 棕褐色	外面 口縁部ヨコナデ④、胴部上位ヨコケズリ①の後、上位左下りのナナメハケメ③・中位右下りのナナメハケメ(7~8本/1cm) 内面 オサエとナデ	2/3存
10503	台 盤	台 付 A	12.6 (12.2) —	胎土 粗かな金雲母、長石、石英等をかなり多く混じえる 焼成 良好 色調 暗茶褐色	外面 口縁部ヨコナデ④、胴部中位ヨコケズリ①の後、上位左下りのナナメハケメ③・中位右下りのナナメハケメ②(7~8本/1cm) 内面 口縁部ヨコナデ、胴部オサエとナデ	1/2弱存
10504	台 盤	台 付 A	— (14.3) 10.6	胎土 粗かな長石、石英等が多く、金雲母はやや少ない 焼成 良好 色調 (暗)黄褐色～(暗)棕褐色	外面 胸部タテハケメ、一部にタテケズリ痕あり、 胴部右下りのナナメハケメ(7~8本/1cm) 内面 胸部ナダ、胸部オサエの後ナダ	胴部完存、胴部下半1/3存 スス付着 二次加熱あり
10505	壺	D	16.7 (21.0)	胎土 粗かな砂粒を多量に混じえる 焼成 普通～やや不良 —	外面 胸部タテハケメ(9本/1cm)、胴部四方向 2段の斜文(上、笠字状結節文2条(中央と下部)、 内面 斜文)と円形浮文3箇×4(中央)を伴う、 胸部1段の斜文、上端にS字状結節文1 箇、下部に円形浮文3箇×7を伴う 内面 ハケメ、胸部オサエ	口縁部1/2欠 胴部の一部にスス 付着 ヨコ
10506	壺	—	— (13.5) 4.6	胎土 粗かな雲母、石英等を少量 のみ含む 焼成 普通～やや良好 色調 黄褐色～棕褐色	外面 胸部細かく丁寧なタテミガキ、接合部ヨコミ ガキ、胸部丁寧なタテミガキ 内面 胸部細かくタテミガキ、胸部上位オサエ、中位右下 りのナナメハケメ(9本/1cm)→下位オサ	胸部下位1/3欠 床面 スス付着あり
10507	小型器 台	—	— (5.3) 82	胎土 目立つような灰雜物をほと んど混じえない 焼成 普通～やや良好 色調 (暗)黄褐色	外面 杯部底部ケズリ、胸部粗いタテミガキ→端部 ヨコナダ 内面 杯部細かく放射状ミガキ、胸部ヨコケズリ→ 端部ヨコナダ	杯部大半欠 胴部底部1/3存 床面
105～ 10601	高 ー	ー	(44.1)	胎土 非常によく精選されている 焼成 良好 —	外面 杯部細かく丁寧なタテミガキ、胸部タテミガ キ 内面 胸部細かく丁寧なタテミガキ、底部ヨ コミガキ	杯部底部3/5存 側面口縫等の小 破損あり 内面の一部にス ス付着 二次加熱あり
105～ 10602	高 ー	ー	(3.9) 7.2	胎土 2mm大的ものを含めて細か い砂粒をかなり多く混じ える 焼成 普通 色調 (暗)暗茶褐色 (器壁)暗青灰色	外面 胸部タテミガキ→端部ヨコナダ 内面 杯部底部ナダ 胸部ヨコナダ	胸部1/4存
10701	台 盤	台 付 ー	— (6.3) 10.4	胎土 粗かな砂粒をかなり多く混 じえる 焼成 普通 色調	外面 胸部タテハケメ(7本/1cm)、胴部ヨコナデ 内面 胸部ヨコハケメ、胸部ナダ	4/5存
10702	壺	—	— (12.8) 7.4	胎土 砂粒を多量に混じえる(光 沢のない黒っぽい植物が多い) 焼成 普通 色調 (暗)黄褐色	外面 胸部下位にタテハケメ(9本/1cm)・底部 にタテケズリの後全体にヨコミガキ、底 面一方向のミガキ 内面 胸部上位ヨコハケメ→中下位右下りのナナ メハケメ(11本/1cm)	胸部中位1/4存 欠

第4表 土器個体説明(3)

土器 番号	器 種 器 形	口径 器高 底径 cm	特 徴	調 整 ・ 文 様	備 考
10703	壺 -	- 0.9.6 7.6	胎土 細かな砂粒を多量に混じえる 焼成 普通～やや不良 色調 (略) 棕褐色	外面 全体に肌あれ 内面 全体に肌あれ、接合部オサエ 胴部中位に焼成後穿孔	暗充存 床面
10704	壺 -	- (2.1) 5.7	胎土 細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成 あまり良くない 色調 <表面> 淡棕褐色 <裏面> 青灰色	外面 肌あれ 内面 肌あれ	1/3存 床面
10705	高杯 A	19.1 (6.3)	胎土 細かな砂粒のみを混じえる 焼成 かなり選別されたもの 普通～やや不良 - 色調 棕褐色	外面 口縁部上位右下りのナナメハケメ (7本/1cm) → 下位右下りのナナメミガキ→ 細折部ヨコナダ 内面 口縁部上位ヨコナダ→ 中・下位左下りにナナメミガキ、底部ヨコミガキ	口縁部1/8欠 底部大半欠 床面 在来系の壺と近いもの
10801	壺 D	16.2 (4.3)	胎土 細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通 - 色調 黄褐色～棕褐色	外面 全体にタテハケメ (7本/1cm) の後 口縁部ヨコナダ 内面 口縁部ヨコハケメ→ 胸部ナデ	1/4存 二次加熱あり
10802	台付 壺 A	- (5.8)	胎土 長石・石英等が多く、企葉母は少ない 焼成 良好 色調 暗黄褐色～淡棕褐色 内面は棕褐色が強い	外面 右下りのナナメハケメ (6本/1cm) 内面 胸部との接合部オサエ、胸部肌あれ	胸部完存
10803	台付 壺 -	- (9.6) 10.4	胎土 一部2～3mm大的ものを含めて、細かな砂粒を多量に混じえる 焼成 普通～やや不良 色調 <表面> 暗黄褐色 <裏面> 淡棕褐色	外面 全体に肌あれ、胸部タテハケメ痕あり (13本/1cm)、胸部タテハケメ痕あり 内面 胸部肌あれ、ヨコハケメ痕あり、胸部ヨコハケメ	完存 スヌ一部付着 二次加熱あり
10804	台付 壺 -	- (7.5) 9.3	胎土 2～3mm大的砂粒の他、微細な企葉母・長石・石英等を混じえる 焼成 普通 色調 (略) 棕褐色	外面 タテハケメ (5～6本/1cm) → 縫部ヨコナダ 内面 卷き状のハケメ→ 縫部ヨコナダ	脚端部1/2存
10805	高杯 -	- (2.9)	胎土 細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通 - 色調 淡黄褐色	外面 肌あれ 内面 胸部底部ミガキか？ 胸部ヨコハケメ (8本/1cm)	完存
10806	小型 土 器	- (1.3) 3.0	胎土 2～3mm大的ものを含めて、細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通 色調 淡棕褐色	外面 粗いタテミガキ 内面 ナデ	完存
11001	台付 壺 A	16.7 (20.9)	胎土 微粗な企葉母・長石・石英等をかなり多く混じえる 焼成 良好 - 色調 (略) 暗黄褐色～(略) 棕褐色	外面 口縁部ヨコナダ①、胸部上位タテハケメ②の後、側面直線 (1本) ③→ 胸中位右下りのナナメハケメ④→ 同下位タテハケメ⑤ (5～6本/1cm) 内面 口縁部ヨコナダ、胸部オサエとナデ	2/5存 床面 スヌ付着あり (内面にも)

第5表 土器個体説明 (4)

土器 番号	器 名	種 類	口径 器高 底径 cm	特 徴	調 整 文 様	備 考
11002	台 盤	付 一	— (4.8) 6.0	胎土 微細な長石・石英等を多く含む 焼成 普通～やや不良 色調 〈表面〉淡黄褐色 〈器壁〉淡青灰色	外面 タテハケメ (8~9本/1cm) 内面 ヨコハケメ、端部ナデ	4/5存
11003	壺	D	16.1 (2.1) —	胎土 2~3mmのものを含めて多量に砂粒を混じえる 焼成 普通～やや不良 色調 〈外面〉(淡)赤褐色 〈内面〉(淡)黄褐色	外面 肌あれ、タテハケメ痕あり (7本/1cm) 内面 1段の斜横文、下端にS字状細線と円形浮文 (3個現存)	1/6存 南西ピット内
11004	壺	—	—	胎土 あまり灰雜物を含まない 焼成 普通～やや不良 色調 (淡)黄褐色～淡褐色	外面 右下りのナメハケメ (7本/1cm) 内面 肌あれ	底部1/4存
11005	壺	—	—	胎土 細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通 色調 〈表面〉淡褐色 〈器壁〉淡青灰色	外面 ヨコミガキ 内面 肌あれ	底部1/4存
11101	壺	D	12.3 (3.5) —	胎土 微細な長石・石英等をかなり多く含む 焼成 やや不良 色調 〈器表〉淡橙褐色 〈器壁〉淡青灰色	外面 赤色塗装、タテのヘラ調整痕あり 内面 斜横文	1/2存 振り方内
11103	杯	—	15.4 4.5	胎土 微細な石英・長石・雲母等のみを混じえるかなり精選されたもの 焼成 やや良好 色調 淡褐色	外面 口縁部上位ヨコナダード下位タテハケメ (11本/1cm)、口縁部と脚部の境界にハケメ筋体を儀位に押模した沈線1条、脚部ケズリ 内面 口縁部左下のナメミガキ、脚部上位ナデ下位肌あれ	口縁部1/3存 一部にスス付着
11201	台 盤	A	— (10.1) 10.5	胎土 長石・石英等が多く企葉母はやや少ない 焼成 良好 色調 淡黄褐色～暗褐色	外面 脚部タテハケメ、脚部右下りのナメハケメ (6本/1cm) 内面 オサエの後ナデ	完存
11202	高杯B	—	13.4 8.2 9.0	胎土 精選されている 焼成 やや良 色調 (淡) 橙褐色	外面 脚部細かく丁寧なタチミガキ、脚部タテケズリの後のナミガキ 内面 脚部細かく丁寧なタチミガキ、但し口唇部のみヨコミガキ、脚部ヨコケズリ	口縁部1/5 底部3/5欠
11203	小型丸 底土器	—	15.5 8.8	胎土 微細な砂粒のみを混じえるかなり精選されたもの 焼成 やや良好 色調 淡黄褐色	外面 口縁部細かいタチミガキ、口縁部と脚部の境界横かいヨコミガキ、脚部ヘラ調整か? 一部タテハケメ痕あり 内面 口縁部上位細かいタチミガキ、中・下位肌あれ、脚部肌あれ	口縁部2/3欠
11301	壺	E	10.6 (6.4) —	胎土 2mmのものを含む砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通～やや不良 色調 淡黄褐色～橙褐色	外面 全体に肌あれ、口縁部タテハケメ痕あり (10本/1cm) 内面 口縁部～脚部の一部ヨコハケメ (6本/1cm)、脚部上位ヨコハケメ (13本/1cm)	口縁部4/5存 肩部2/3存

第6表 土器個体説明 (5)

土器 番号	器 器 形	口径 器高 底径 cm	特 徴	調 整 ・ 文 様	備 考
11302	壺 -	- - -	胎土 2~3mm大のかなり大きめの砂粒まで混じえる 焼成 普通 色調 暗茶褐色	外面 タテハケメ(11本/1cm)の後ヨコミガキ、底面木葉模 内面 肌あれ	底部1/2存
11303	鉢	12.1 8.1 4.1	胎土 2~3mm大のかなり大きめの砂粒まで混じえる 焼成 普通 色調 暗茶褐色	外面 口縁部~胴部上位ヨコナダ→胴部ケズリ 内面 口縁部ヨコハケメ(9本/1cm)の後ヨコナ デ、胴部ナダ	1/2弱欠 内面一部にスス付 着
11304	小型丸 底土器 (2.1)	- 4.0	胎土 長石、石英がめだつが、他に全雲母等も含む 焼成 疾手 色調 (外面) 暗橙褐色 (内面) 暗黄褐色	外面 細かく丁寧なタテミガキ 内面 肌あれ	底部完存 他に胴部の小破片 1あり
11401	台付 盤 A	16.1 (21.3) -	胎土 微細な全雲母、長石を多く含む 焼成 良好 色調 (暗) 黄褐色～(暗) 橙褐色	外面 口縁部ヨコナダ→胴部上位左下りのナナメハ ケメ→中・下位右下りのナナメハケメ(8本 /1cm) 内面 口縁部ヨコナダ、胴部オサエの後ヨコハケメ とナダ	台、脚部を欠く他 は略完存 スス付着
11402	台付 盤 A	9.9 (6.9)	胎土 細かな全雲母・石英・長石等を多く含む 焼成 良好 色調 (暗) 黄褐色～(暗) 橙褐色	外面 右下りのナナメハケメ(9本/1cm) 内面 オサエとナダ	2/3存 床面
11403	一 要 D	16.0 4.4 -	胎土 砂粒をあまり多く混じえない 焼成 普通～やや不良 色調 暗橙褐色	外面 肌あれ、タテハケメ痕あり(8本/1cm) 内面 口縁部ヨコハケメ、胴部ナダか?	1/5存
11404	壺 B	11.5 (2.7) -	胎土 2~3mm大のものを含めて砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通～やや良好 色調 暗橙褐色	外面 ヨコナダ、竹管文を付加した円形浮文(3個 現存) 内面 ヨコナダ、横描直線文(5本1単位)+ 横描 直線文(同2単位以上)	1/6存
11405	壺 -		胎土 2~3mm大のものを含めて細かな質繊物を多量に混じえる 焼成 普通 色調 茶褐色	外面 タテハケメ(5本/1cm) 内面 ヨコハケメ	底部1/3存
11406	高杯 -	- (3.0) -	胎土 長石を主に、細かな質繊物を多量に混じえる 焼成 普通 色調 暗橙褐色	外面 粗いタテミガキ 内面 シボリ痕・ヨコハケメ痕あり	完存
11407	小型器 台 A	9.4 (2.5) -	胎土 かなり精選されたもの 焼成 普通 色調 暗黄褐色	外面 壺部口縁部ヨコナダ、底部タテケズリ 内面 壺部口縁部ヨコナダ→底部タテミガキ	口縁部1/3弱存

第7表 土器個体説明(6)

土器 番号	器 形	口縁 器高 底径 cm	特 微	調 整 ・ 文 種	備 考
11501	台付 甕 A	11.1 (8.2)	胎土 細かな金雲母と粗細な長石等をかなり多く含む 焼成 良好 色調 暗茶褐色	外面 口縁部ヨコナダ①、胴部中位ヨコケズリ②の後、上位左下りのナナメハケメ③→中位右下りのナナメハケメ③ (8本/1cm) 内面 口縁部ヨコナダ、胴部オナエの後ナデ	4/5存 スス付着あり
11502	台付 甕 A	8.6 (5.5)	胎土 粗細な金雲母、長石を含む 焼成 良好 — 色調 暗茶褐色	外面 ハケメ 内面 ナデ	略完存 スス付着
11503	手捏ね 土器	2.3 2.7 2.9	胎土 目につく異種物をほとんど含まない 焼成 普通 色調 淡黄褐色	外面 ナダ 内面 ナダ	1/3存
11601	高杯 B	19.0 (5.1)	胎土 粗細な砂粒のみを混じえた かなり精選されたもの 焼成 普通 色調 (器表) 黄褐色～橙褐色 (器壁) 淡青灰色	外面 杯部上位ヨコナダの後、全体をタテミガキ (上半はかなり粗雑) 内面 杯部上位ヨコナダの後、全体を放射状ミガキ (上半はかなり粗雑)	口縁部1/4存 他に杯底の一部まで残る破片も有 外縁の一部にスス付着
11701	台付 甕 A	— 5.2 11.2	胎土 金雲母が多く長石等は少ない 焼成 良好 色調 暗茶褐色	外面 右下りのナナメハケメ (9本/1cm) 内面 ナダ	1/5存
11801	小型丸 底土器	10.1 7.3 2.7	胎土 精選されている 焼成 やや良 色調 (説) 橙褐色	外面 口縁部上位ヨコナダの後、口縁部～胴部上位 細かく丁寧なヨコミガキ胴部下位ケズリ 内面 口縁部細かく丁寧なヨコミガキ、胴部オナエ とナダ	口縁部1/2欠 掘り方内
11901	— 甕 D	— 3.3 5.7	胎土 2mm大のものを含む砂粒を かなり多く混じえる 焼成 普通～やや不良 色調 (器表) 淡黄褐色～橙褐色 (器壁) 淡青灰色	外面 肌あれ。タテハケメ直あり (8本/1cm) 内面 肌あれ、ヨコハケメ直あり	端部1/4存
12001	— 甕 D	16.5 (6.0)	胎土 2～3mm大の砂粒を多量に 混じえる 焼成 普通～やや良 色調 淡黄褐色～橙褐色	外面 口唇部ヨコナダ～口縁部右下りのナナメハケ メ→頸部タテハケメ→胴部ヨコハケメ (9本 /1cm) 内面 口縁部～頸部ヨコハケメ、胴部ハケメとナダ	1/5存 他に同一個体の小 片44あり
12101	小型高 杯 -	— (2.0)	胎土 粗細な砂粒のみを混じえる 焼成 普通～やや不良 色調 (器表) 橙褐色 (器壁) 淡青灰色	外面 細かいタテミガキ 内面 肌あれ	1/5存 在来系の盡と近い もの
12201	甕 D	16.7 (2.2)	胎土 細かな砂粒を多量に混じえ る 焼成 普通～やや不良 — 色調 (説) 黄褐色	外面 肌あれ。タテハケメ直あり (7本/1cm) 内面 刻織文、上端にS字状結節文1条、下端に円 形浮文 (3個現存)	口縁部1/3存

第8表 土器個体説明 (7)

土器 番号	器形	口径 底径 cm	特 徴	調 整 文 様	備 考
12202	小型丸 底土器	9.1 (4.6) —	胎土 目につく ような夾雜物をほ とんど混じえない 焼成 良好 色調 (外面) 淡檜褐色 (内面) 墓黃褐色	外側 細かく 丁寧なヨコミガキ一部にタテハケメ 底あり 内面 口縁部細かく 丁寧なヨコミガキ 脚部肌あれ	口縁部1/5存 特製土器 振り方内
12301	台付 甕 A	9.5 11.6 5.2	胎土 かなり精選されたもの 焼成 やや良 色調 (淡)茶褐色	外側 口縁部ヨコナダ～脚部上位に左下りのナナメ ハケメ～脚部全体に生に右下りのナナメハケ メ(4～5本/1cm) 内面 口縁部ヨコナダ～脚部上位ヨコハケメ～中位 へラ調整か?→下位ヨコハケメ	略完形 半面に2次加熱 スヌ付器 ピット中
12501	一 甕 D	19.6 (8.0) —	胎土 2～3mm次のものを含めて 砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通 色調 淡檜褐色	外側 口縁部上位ヨコナダ～中・下位タテハケメ～ 脚部ヨコハケメ(6本/1cm) 内面 口縁部上位ヨコナダ～中・下位ヨコハケメ (11本/1cm)～接合部ナダ～脚部ヨコハケ メ(6本/1cm)	1/4存 スヌ付器 二次加熱あり
12502	一 甕 D	18.7 9.7 —	胎土 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色～淡檜褐色	外側 口縁部上位ヨコナダ～下位タテハケメ～脚部 ヨコハケメ(6～7本/1cm) 内面 口縁部ヨコハケメ、脚部ナダ	略完形 二次加熱あり
12503	壺 E	15.7 (2.0)	胎土 細かな長石等を多量に混じ える 焼成 普通 色調 淡檜褐色	外側 タテミガキか? 内面 ヨコナダ、ナナメハケメ底あり	1/3存 櫻土内
12504	壺 —	— (13.2) 9.3	胎土 3mm大のものを含む砂粒を 多量に混じえる 焼成 普通 色調 淡黄褐色	外側 ヨコミガキ一部にヨコハケメ底あり(11本/ 1cm) 内面 ヨコハケメ(8本/1cm)	底部1/2存 二次加熱あり
12505	壺 —	—	胎土 細かな砂粒を多量に混じえ る 焼成 普通～やや不良 色調 (器表) 淡檜褐色 (器壁) 淡青灰色	外側 肌あれ 内面 肌あれ	底部1/2存
12506	壺 —	—	胎土 1mm前後の砂粒を混じえる 焼成 普通～やや良好 色調 黄褐色～淡褐色	外側 タテハケメ(11本/1cm)の後ヨコミガキ 内面 ヨコハケメ(7本/1cm)	底部1/2存
12507	鉢	— (5.7) 3.3	胎土 2～3mm次のものを含む砂粒を多量に 混じえる 焼成 普通 色調 (外面) 檜褐色 (内面) 墓黃褐色	外側 タテ方向のハケメ(11本/1cm)の後相いヨ コミガキ 内面 肌あれ	2/3弱存
12901	一 甕 D	14.9 (12.0) —	胎土 微細な長石等をかなり多く 含む 焼成 普通 色調 明茶褐色	外側 口縁部ヨコナダ～接合部タテハケメ～脚部上 位右下りのナナメハケメ～下位タテハケメ(6 ～7本/1cm) 内面 ヨコハケメ	口縫部略完形、脚 部上半部1/3存 二次加熱あり 櫻土中

第9表 土器個体説明 (8)

土器 番号	器 形	口径 器高 底径 cm	特 徴	調 整 + 文 横	備 考
12902	高杯 A	13.7 (5.7)	胎土 かなり精選されたもの 焼成 やや良 — 色調 淡黄褐色～暗褐色	外面 杯部口縁部細かく丁寧なタテミガキ 内面 杯部口縁部ヨコミガキ→口縁部細かく丁寧なタテミガキ→底部細かく丁寧な一方向ミガキ、赤彩痕あり	略完存 糊り方内
0001	台付 甕 A	20.1 (18.5)	胎土 濃細な長石、石英等が多く、金雲母はやや少ない 焼成 良好 — 色調 暗黄褐色	外面 口縁部ヨコナデ③胴部上位下りのナナメハケ ノ④の後擦拭直線文③→胴中位右下りのナナメハケメ① (6本/1cm) 内面 口縁部ヨコナデ、胴部オサエとナデ	胴部1/4欠 中位4/5欠 口縁部～胴部上位 外面スス付着
0002	台付 甕 A	14.3 4.3 —	胎土 細かな金雲母、長石、石英等を多く含む 焼成 S字としてはやや不良 色調 (器表)暗褐色～暗茶褐色 (器壁)黒褐色	外面 口縁部ヨコナデ～胴部上位左下りのナナメハケメ (7本/1cm) 内面 口縁部ヨコナデ、胴部上位オサエ	1/3存
0003	台付 甕 A	6.5 8.9	胎土 濃細な金雲母、石英、長石等を多く含む 焼成 良好 色調 暗黄褐色～暗褐色	外面 右下りのナナメハケメ (8本/1cm) 内面 オサエとナデ	完存 スス付着あり
0004	台付 甕 A	— 10.0 9.6	胎土 長石、石英、金雲母等が多い 焼成 良好 色調 暗黄褐色～暗褐色	外面 胎部タテハケメ、脚部右下りのナナメハケメ (5本/1cm) 内面 脚部ナデ、脚部オサエとナデ	脚部完存、胴下端 部1/4存 一部にスス付着
0005	台付 甕 —	— (4.0) 5.8	胎土 2mm大のものを含めて砂粒を混じる 焼成 普通 色調 黄褐色	外面 ナデか 内面 ヨコハケメ (6本/1cm) の後ヨコナデ	3/4存 二次加熱あり
0006	台付 甕 —	— (7.0) 10.5	胎土 0.2～0.3mmの長石、石英を含む 焼成 普通 色調 (暗) 黄褐色	外面 肌あれ、端部タテハケメ (14本/1cm) 内面 ヨコハケメ	1/4強存
0007	壺 E	11.6 (13.5) —	胎土 2mm大のものを含む砂粒を混じる 焼成 普通～やや不良 色調 (外面)(淡) 暗褐色 (内面)(淡) 黄褐色	外面 肌あれ、タテヘラ調整痕あり 内面 肌あれ、胴部上位にヨコハケメ痕あり (11本/1cm)	1/2存
0008	壺 E	13.1 (6.2) —	胎土 濃細な砂粒をかなり多く混じる 焼成 普通～やや不良 色調 黄褐色	外面 肌あれ、タテハケメ痕あり 内面 肌あれ、接合部ヨコハケメ (7～8本/1cm)	1/3存
0009	高杯 B	— 6.0 —	胎土 細かな砂粒をかなり多量に混じる 焼成 普通～やや不良 色調 (外面) 明褐色 (内面) 暗褐色	外面 杯部底部タテハケメ痕あり 内面 杯部口縁部ヨコミガキ	杯部上半、脚部大半欠 二次加熱あり

第10表 土器個体説明 (9)

土器 番号	器 形	口径 器高 底径 cm	特 徴	調 整 ・ 文 様	備 考
0010	高杯一	— 6.9 10.2	胎土 細かな金雲母、石英等をかなり多量に混じえる 焼成 普通 色調 (暗) 黄褐色	外面 タチミガキ 内面 ヨコナデ	脚部略充存 二次加熱あり
0011	高杯一	— 6.5 8.5	胎土 細かな砂粒をかなり多く混じえる 焼成 あまり良くない 色調 暗黄褐色	外面 肌あれ 内面 肌あれ	脚部 1/5 強存
0012	小型高杯 B	10.9 (3.6)	胎土 目につくような夾雜物をあまり混じえない 焼成 普通～やや良好 色調 (暗) 橙褐色	外面 杯部口縁部上位ヨコナデ～下位～底部丁寧なタチケズリ 内面 杯部口縁部細かいナナメミガキ、底部粗かい放射状ミガキ	口縁部 1/5 強存
0013	小型器台 —	— (4.8)	胎土 目につくような夾雜物をあまり混じえない 焼成 普通～やや良好 色調 (暗) 橙褐色	外面 粗いテナのヘラ調整 内面 ヨコケズリ	充存
0014	小型器台 —	— (2.8) 8.1	胎土 目につくような夾雜物をあまり混じえない 焼成 普通～やや良好 色調 (暗) 橙褐色	外面 粗いテナのヘラ調整 内面 ヨコケズリ	充存
0015	小型丸底 土器	13.3 (7.6)	胎土 細かな石英、長石、雲母等をかなり多量に混じえる 焼成 あまり良くない 色調 黄褐色～橙褐色	外面 肌あれ、口縁部下位にタチミガキ痕あり 内面 口縁部肌あれ、脚部ヨコナデ	口縁部 1/6弱存
0016	小型丸底 土器	14.7 (4.2)	胎土 散細な砂粒をかなり多く混じえる 焼成 普通～やや不良 色調 暗黄褐色	外面 肌あれ 内面 ナナメミガキらしい	口縁部 1/2 存 二次加熱あり
0017	杯	16.4 (5.4)	胎土 細かな砂粒のみを混じえる 焼成 やや良好 色調 (表面) 暗黄褐色 (器壁) 暗青灰色	外面 口縁部ヨコナデ～接合部タチハケメ (12本/1cm)～脚部ヨコケズリ 内面 口縁部上位ヨコナデ～下位～脚部ヨコハケメ (9本/1cm)	口縁部 1/4 存 施に小破片 2 あり
U C 0101	壺B	20.4 (34.5)	胎土 砂粒を多く含む 焼成 普通～やや不良 色調 (表面) 暗黄褐色～淡橙褐色 (器壁) 暗青灰色	外面 壺口縁部棒状浮文 (6本×5), 脚部上位肌あれ、同下位同方向に2段の刺繡文 (LR) ・上段中に円形浮文 (4個×4), 脚部上位ヨコミガキ・赤色繪彩らしい、同下位肌あれ 内面 口縫部ヨコミガキ・赤色繪彩・脚部肌あれ	脚部 1/3、底部欠
U C 0102	鉢	12.2 11.2 4.7	胎土 石英粒を多く含むが砂粒少ない 焼成 普通～やや良好 色調 茶褐色	外面 脚部上位右下りのナナメハケメ (6本/1cm)～同中位ヨコミガキ、同下位タチハケメ (9本/1cm)の後タチミガキ 内面 脚部上位ヨコハケメ (6本/1cm)の後ヨコミガキ、同中位～下位タチミガキ	充存

第11表 土器體説明 (10)

土器 番号	器 形	口径 器高 底径 cm	特 徴	調 整 文 様	備 考
UC 0103	壺 D	15.0 5.0 —	胎土 粒子の大きさ 砂粒を含んで 燒成 普通～やや不良 色調 [器表]淡黄褐色 [器壁]暗褐色	外面 ヨコおよび右下り のオカケメ 内面 肌あれ	口縁1／8存
UC 0104	台付 壺 D	20.6 25.5 9.4	胎土 粗粗の石英、砂粒多し 燒成 普通 色調 暗黄褐色～茶褐色	外面 口縁部タテハケメ～胴部上位 ヨコ右下り ナメハケメ～同下位タテハケメ 脇部タテ ハケメ (8本 1cm) 内面 口縁部 ヨコハケメ 脇部上位 ～中位 コナデ ～同下位 ヨコハケメ 脇部ヨコハケメ	略完存
UC 0105	壺 D	18.7 (17.9) —	胎土 砂粒多し 燒成 普通 色調 [器表]淡黄褐色～淡橙褐色 [器壁]淡青灰色	外面 折返し口縁部開あ、口縁部タテハケメ (1本 1cm)、胴部上位 羽状に2段の刺繡文 (R,L) ・上端に円形浮文 (2個×3)、同中位赤色塗 彩らしい 内面 脇部ヨコハケメ 脇部～胴部中位 ヨコハケメ (5 ～6本 1cm)	口縁部1／3、底 部欠
UC 0106	壺 D	16.6 8.7 —	胎土 砂粒多し 燒成 普通 色調 [器表]黄褐色 [器壁]淡青灰色	外面 折返し口縁部上位ナメハケメ、同下位 オホ エ、頸部右下り のナメハダギ8本 1cm 内面 口縁部1段の刺繡文 (R,L)、口縁部ヨコハ ケメ、接合部オサエ	口縁部1／3存
UC 0107	— 壺 D	17.4 (5.8) —	胎土 砂粒、長石多し。小 む 燒成 普通 色調 黄褐色～橙褐色	外面 口縁部タテハケメ～胴部ヨコハケメ (12本 1cm) 内面 口縁部ヨコハケメ、胴部ナデ	1／4存
UC 0108	壺 D	14.4 23.3 8.1	胎土 砂粒極めて多い 燒成 普通～やや不良 色調 [器表]淡黄褐色～淡橙褐色 [器壁]淡青灰色	外面 折返し口縁部ヨコハケメ、頸部～胴部中位 下り のナメハケメ～胴部中位ヨコハ ケメ 内面 脇部下位タテハケメ 脱離 木脂痕 口縁部～胴部下位 ヨコハケメ、口縁部赤色塗 彩	石底部1／3欠 剥落著しい
UC 0109	壺 E	16.4 (17.8)	胎土 砂粒極めて多いこのため器 面の調整は 不鮮明 燒成 普通～やや不良 色調 [器表]淡黄褐色 [器壁]淡青灰色	外面 口縫部タテハケメ 脇部羽状に3段の刺繡文 胴部上位 右下り のナメハダギ8本 1cm 内面 全体に肌あれ、接合部オサエ	口縫1／2欠
UC 0110	壺 —	— (24.3) —	胎土 砂粒多し。長石石英、金 雲母含む 燒成 普通 色調 [器表]淡黄褐色～淡橙褐色 [器壁]淡青灰色	外面 頸部タテハケメ タテミガキ・赤色塗彩、 頸部同方向に2段の刺繡文 (L,R)、胴部上位 右下位左下のナメハケメ (8本 1cm)・赤色 塗彩 内面 頸部ヨコハケメ、接合部肌あれ、胴部上位 ヨコハケメ (8本 1cm)、6本 1cm	1／8残 頸以下図 上は 既 完形
UC 0111	台付 壺 D	18.8 24.6 9.5	胎土 砂粒多し。石英若干含む (ボロボロと落ちるような もろさ) 燒成 普通 色調 暗茶褐色	外面 口縫部ヨコハケメの後側み目、口縫部タテハケ メ、胴部上位ヨコ～右下りのナメハケメ、胴部ヨコハ ケメ、同端部ヨコハケメ (8～9本 1cm) 内面 口縫部ヨコハケメ～胴部ヨコのヘラ調整か? 胴部ヨコハケメ	略完存
UC 0112	台付 壺 D	21.0 29.3 10.0	胎土 砂粒、石英多し 燒成 普通～やや不良 色調 暗黄褐色～淡茶褐色	外面 口縫部ヨコハケメ 略側み目、口縫部ヨコ ハケメ、胴部上位 ヨコ右下りのナメハケメ、 胴部ヨコハケメ、同端部ヨコハケメ (8本 1cm) 内面 口縫部ヨコハケメ、胴部ヨコのヘラ調整? 胴部ヨコハケメ	略完存

第12表 土器箇体説明 (11)

② 銅 鎌(第19図1)

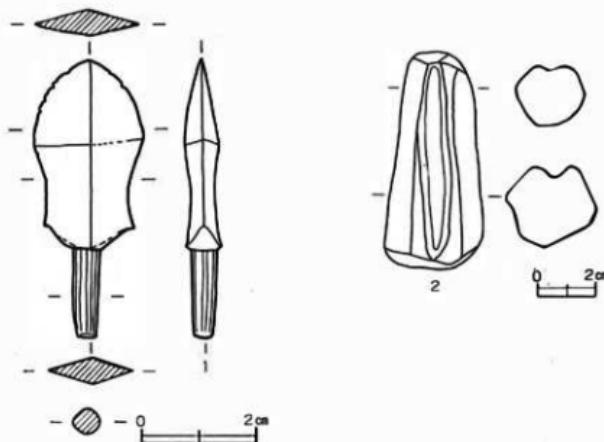
第110号住居跡内西北隅付近床面上より1点検出された。全長4.2cm、身長3.3cm、身巾1.9cm、厚さ0.6cm、茎長1.5cmを測る。

③ ガラス玉

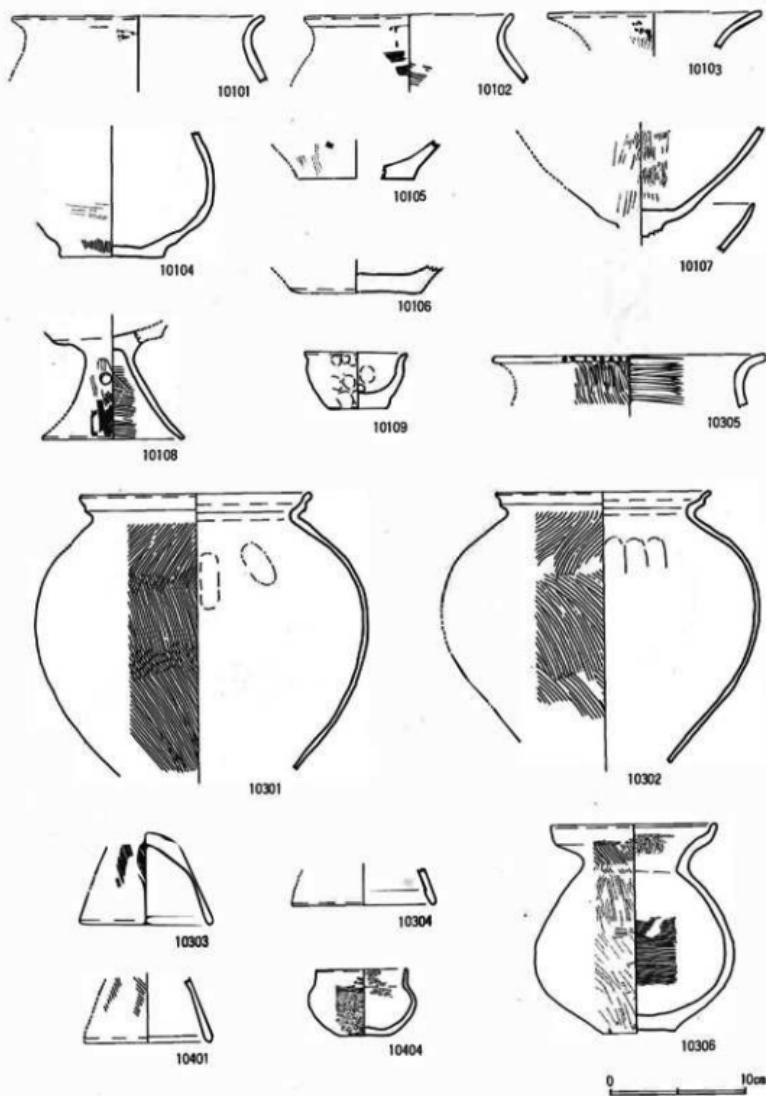
第110号住居跡内より1点検出された。ガラス製の丸玉で、濃淡色を呈する。劣化の残存状況で、しかも数個に粉碎されている。

④ 砧 石(第19図2)

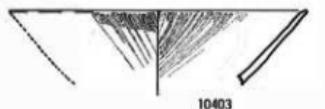
第111号住居跡床面上より検出された。材質は、凝灰質砂質頁岩であり、砥面は非常に微細である。全長7.5cm、巾2~3.5cm程の六角柱状の砥石である。6面中、4面に砥面の痕跡が認められる。



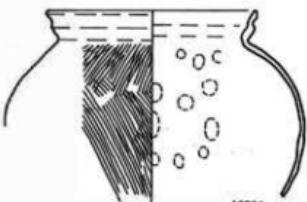
第19図 古墳時代遺物実測図



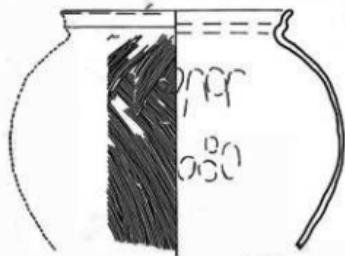
第20図 土器実測図(1)



10403



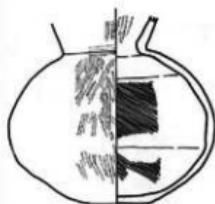
10501



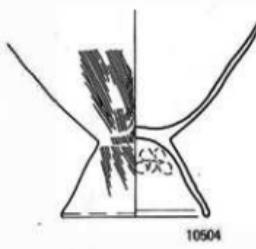
10502



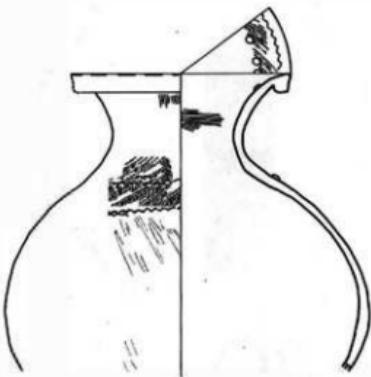
10503



10506



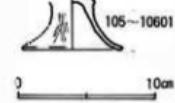
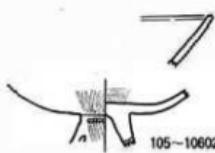
10504



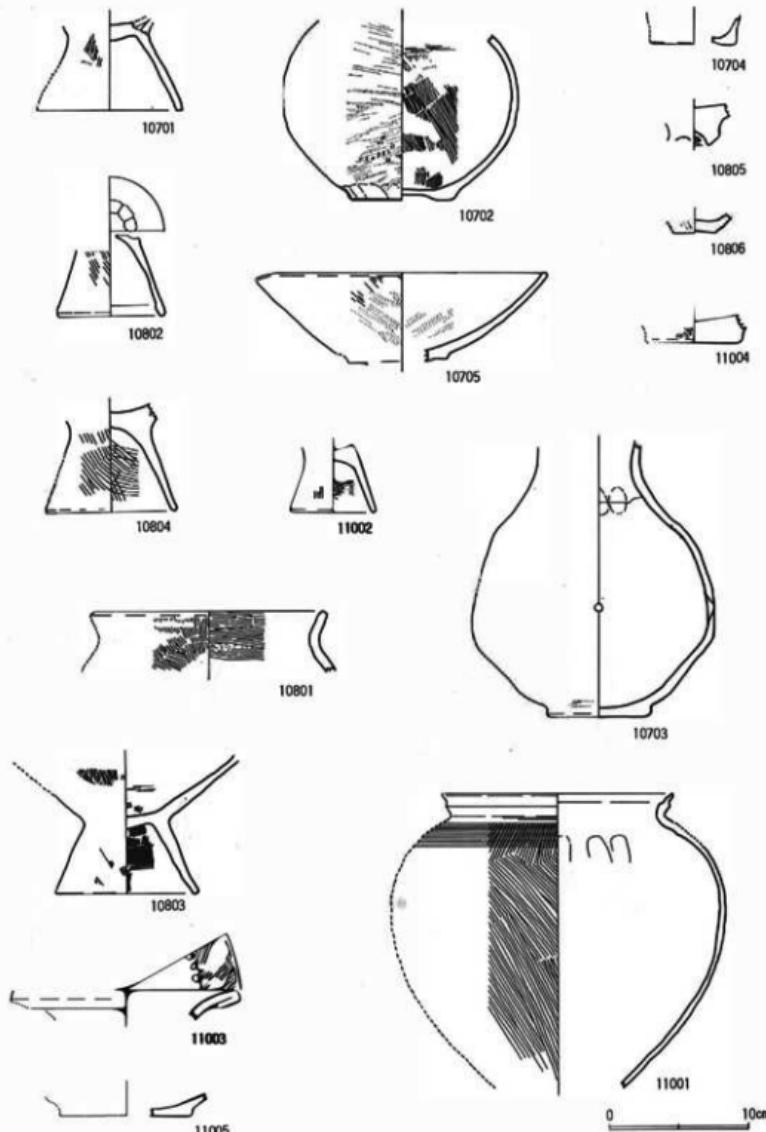
10505



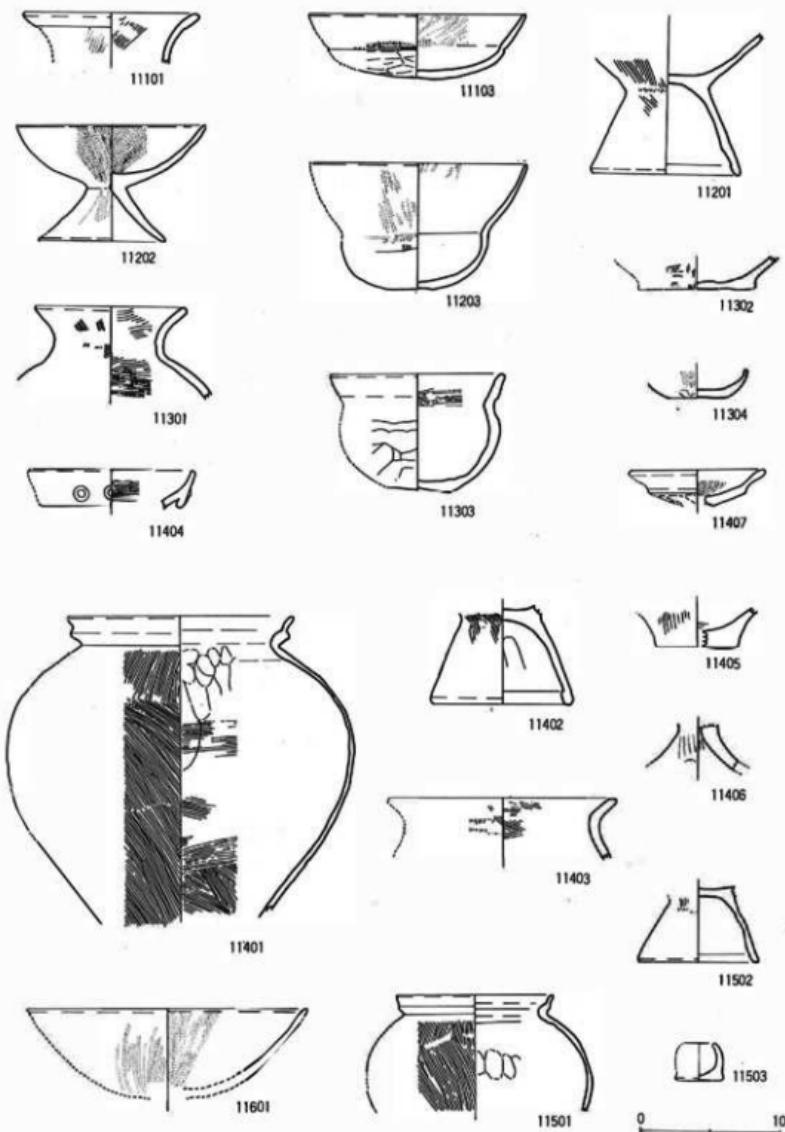
105-10602



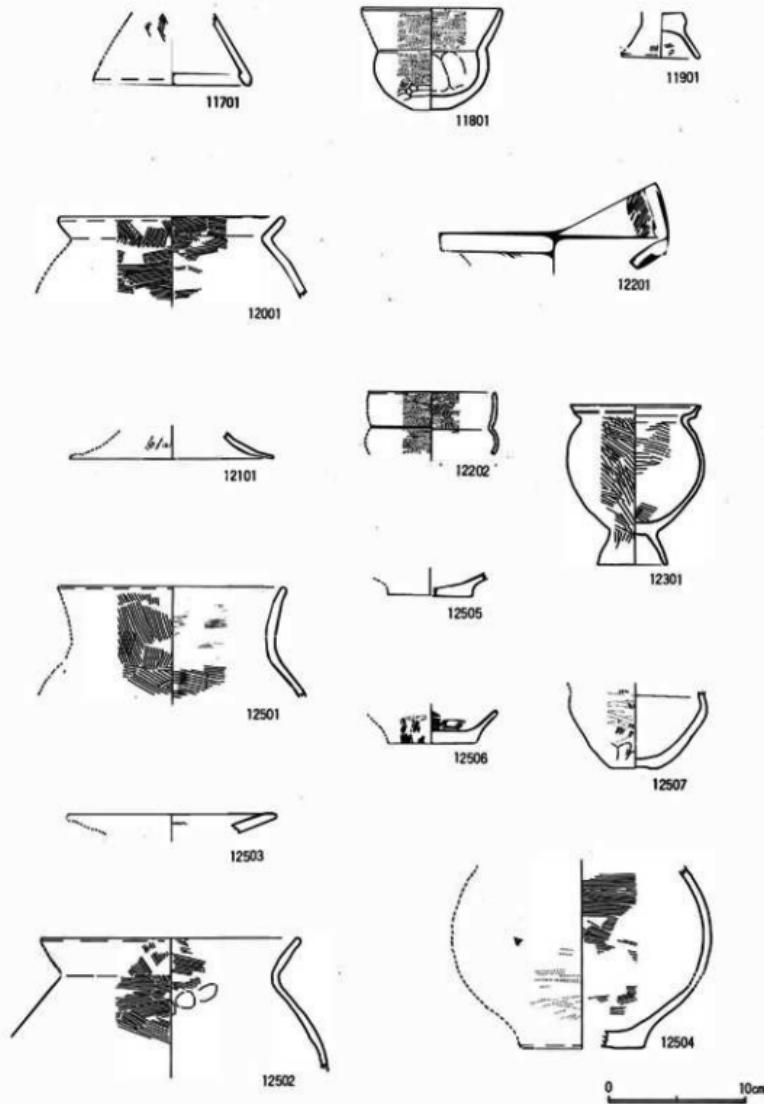
第21図 土器実測図(2)



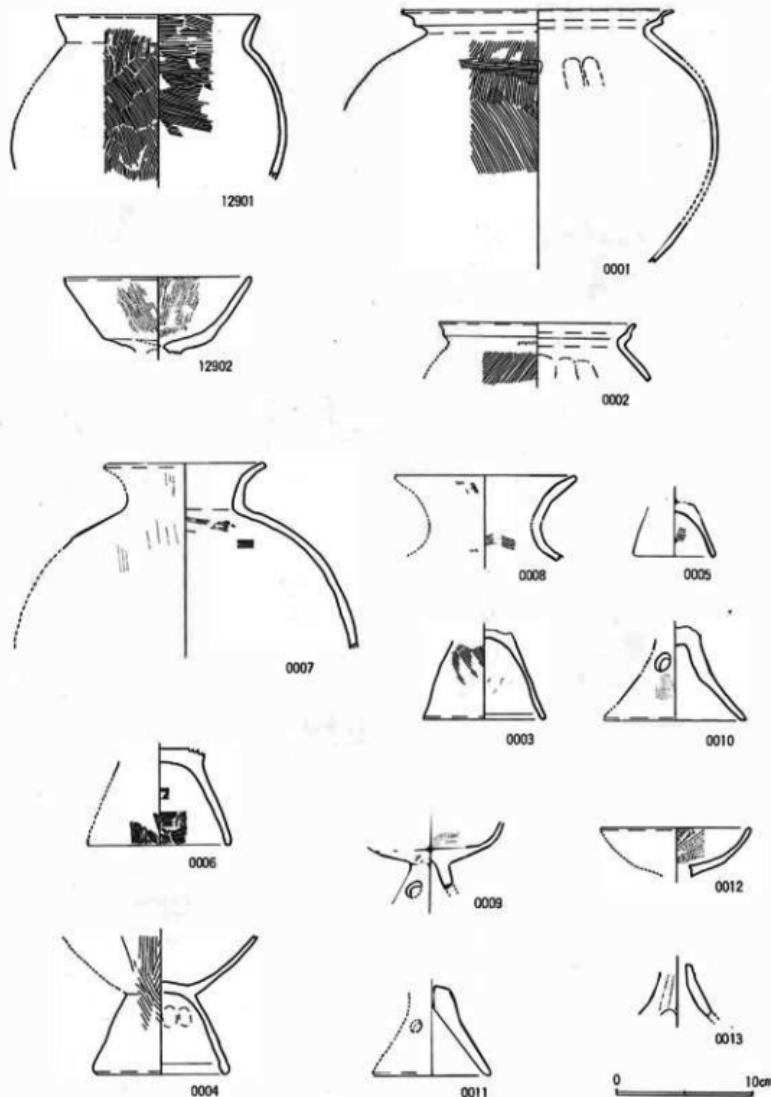
第22図 土器実測図(3)



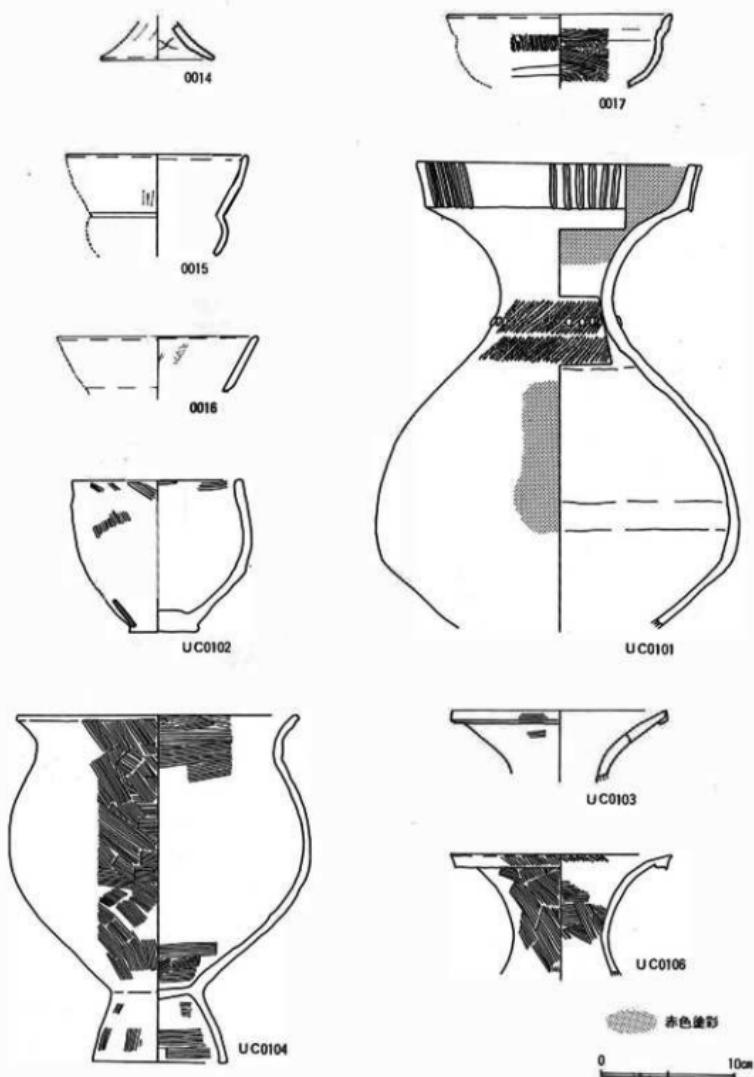
第23図 土器実測図(4)



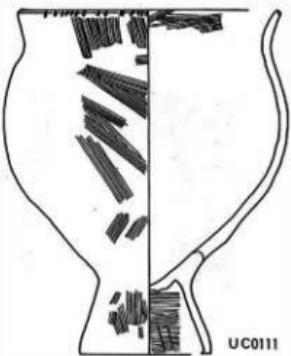
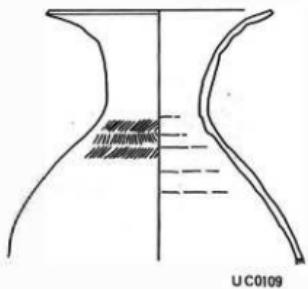
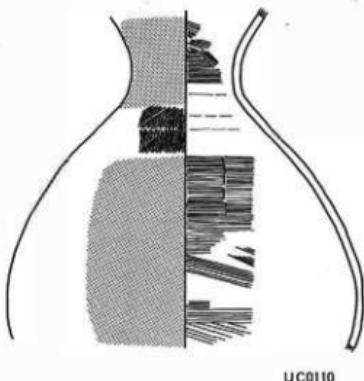
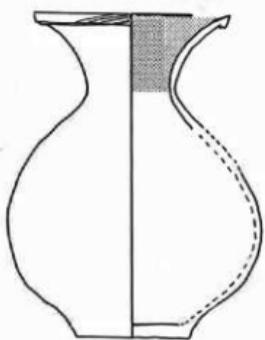
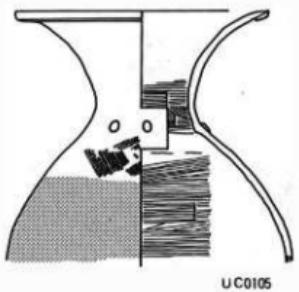
第24図 土器実測図(5)



第25図 土器実測図(6)

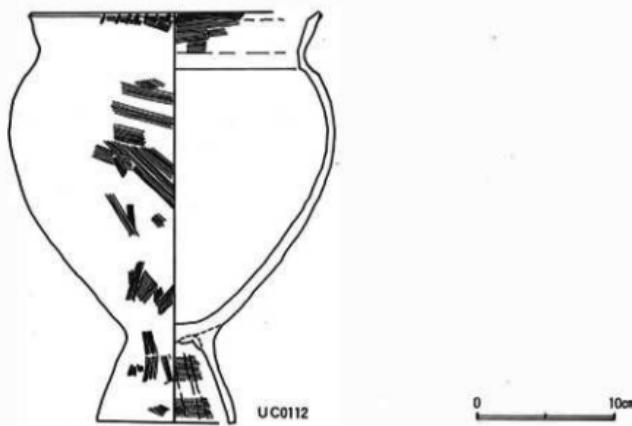


第26図 土器実測図(7)

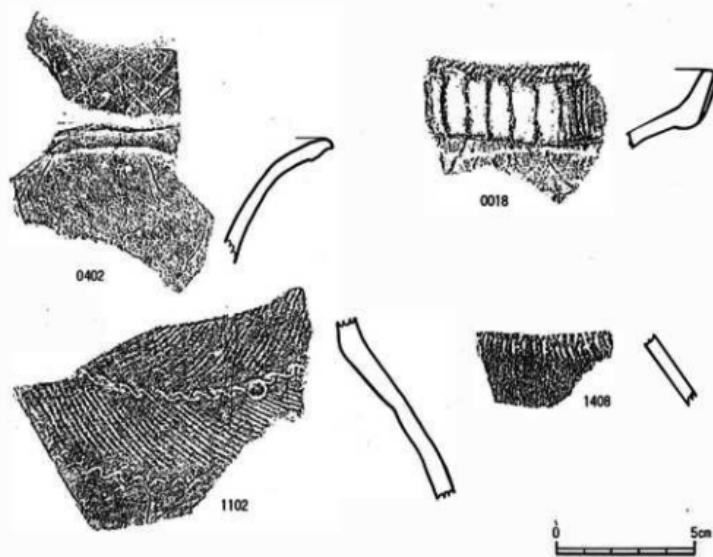


0 10cm
赤色塗彩

第27図 土器実測図(8)



第28図 土器実測図(8)



第29図 土器拓影図

IV 2、3の問題

1. 月の輪平遺跡の集落構成・補正

月の輪平遺跡第1～5次調査により発見された86棟の住居跡に基づく集落構成の分析はすでになされている。(馬銅野1981)ここでは今回発見された31棟の住居跡を加えた117棟の住居跡をもとに、それに対する補正を行っておきたい。なお本章では、便宜的に台地西側寄りにみられた斜面を境にして上の面をA地区、下の面をB地区とする。

① 住居跡の規模

今回発見された31棟の住居跡を加えた117棟の住居跡のうち、規模を測り得る住居跡は86棟であった。その結果、前回の調査結果から分け得た大型住居跡、一般住居跡、小窓穴遺構の3分類は規模の分布状況からみて変化はみられなかった(第31図)。内容的には、小窓穴遺構とよんだ床面積7m²以下のものは今回の調査では検出されず前回同様12棟であった。しかし、床面積45m²以上の大型住居跡は1棟増えて7棟となった。残りの67棟は一般住居跡に含まれるものであった。なお大型住居跡は、規模とともに集落内での位置関係が重要であるが、この点では今回第104号住居跡を他のものと大きく離れて検出したことで問題を残した。

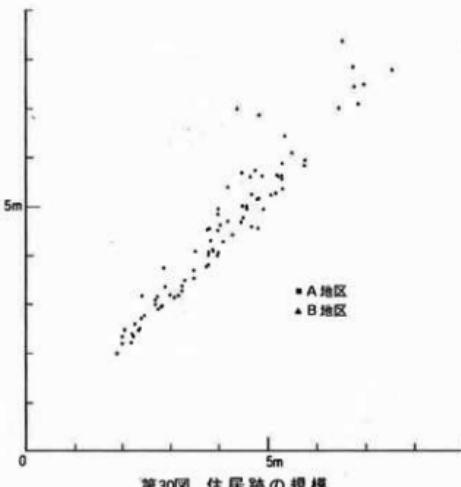
B地区で検出された住居跡とA地区のものとを比較すると、まず第一にB地区では小窓穴遺跡、大型住居跡が検出されず、すべてが一般住居跡の範疇に入るものであること。第二にその一般住居もB地区のものの方がA地区のものに比べ総体的に大きめであること、以上2つの特徴があげられる。

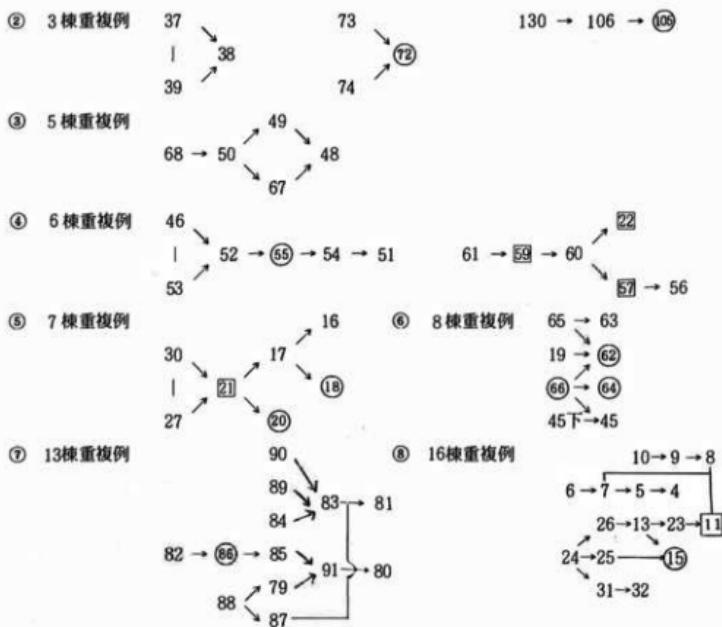
② 住居跡の重複

本遺跡の窓穴住居跡は複雑に重複しあった形で検出されることが多い。そこで前回調査例を含めて重複関係を分類すると次のようになる。

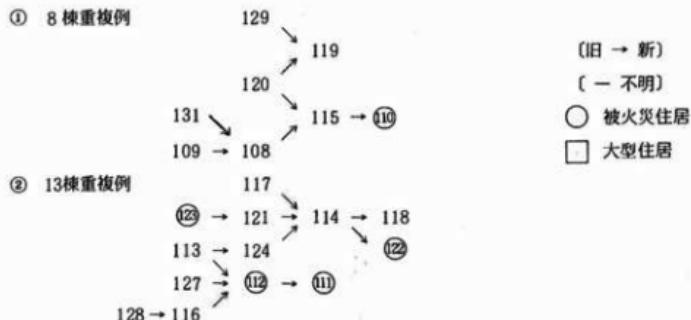
(1) A地区

- ① 2棟重複例 35 → 36 41 → 40 71 → 70 77 → ⑩ 78 → 75 104 → ⑩





(2) B地区



以上をまとめてみれば、重複住跡数16棟、7棟、5棟が各1地点、13棟、8棟、6棟が各2地点、3棟が3地点、2棟が6地点、他に単独で14棟が存在する。

住跡の重複関係を集落の変遷という観点から整理してみると、重複地点18のうち最低5時期以上の変遷が考えられるもの1地点、5時期以上が5地点、4時期以上が2地点、3時期以上が2地点、2時期以上が8地点という形になる。これからすれば、本遺跡では少なくとも4~5時期以上

の集落変遷を想定することが可能であろう。

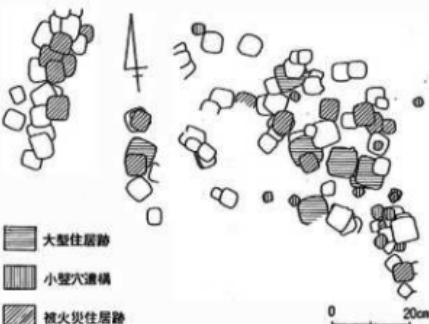
なお、大型住居跡が1時期に1棟であるとする見解（田中 1976）を仮に認め得るとすれば、今回の調査の結果、大型住居跡が7棟となったことで、本遺跡に7時期の集落変遷を認めなければならないことになる。

③ 被火災住居

本遺跡で被火災住居跡は今回検出された8棟を含め20棟である。これら被火災住居跡は、2度の火災の遭遇が指摘されている。このうち遺跡全体に分布する新しい時期の被火災住居跡については住居跡の新旧関係で一番新しい時期を占め、出土土器もS字状口縁台付壺4類が主体となる大廓式土器（新）であることからみて、同時存在の住居跡群に置き換えることができると思われる。それによれば、第64、62、18号住居跡、第20、15、33号住居跡、第103・105号住居跡、第110・111・122号住居跡というような、1単位2~3棟づつの住居跡群が少なくとも4単位以上集まって（未発掘区中になお1単位以上の住居跡群を想定することが可能である）、集落を構成するらしい。しかも、それはよく指摘されるような共通の空間（広場）を有する集落構成とは大きく違った形でとらえる必要があるといえる。

以上のように新しい時期の被火災住居跡のある時期の集落構成として認めた場合、これに住居跡の性格に基づいて分類された大型住居跡や小窓穴造構（但し、第76号住居跡はこの段階のものである可能性をもつ）が含まれないことは、別の問題を提起するといえるであろう。

以上、住居跡の規模、住居跡の重複、被火災住居跡の3点につき補正を行った。いずれも問題を提起したにとどまり、結論らしきものを見出すに至らなかった。これらいくつかの問題については今後の課題として検討してゆきたい。（渡井、加納）



第31図 住居跡規模及び被火災住居跡分布図

2. 銅鏡について

① 本遺跡出土の銅鏡

本遺跡出土の銅鏡は、全長4.2cm、身長3.3cm、身巾1.9cm、厚さ0.6cm、茎長1.5cmを測る。刃部に刃こぼれがめだつものの全体的に良好な遺存状況といえる。銅質は比較的よいが、一部に「す」状の白い部分がまじる。形状は「柳葉形」で、鋒の外縁線は、先端から中央にむかってゆるやかに外彎する。鏡は十文字鏡で、中心に縦に一直線と、それに直交する不明瞭な横筋を有する。闇は鈍角で、内彎ぎみにおいて両端でわずかに外彎する。色調は暗緑色である。時期的にみると、S字状口縁台付鏡4類が出土する住居跡の床面から出土していることから、大嘗式土器（新）の時期と推定できる。

② 静岡県内出土の銅鏡

静岡県における銅鏡出土遺跡は現在のところ22遺跡が知られている。その種類は、古墳12、集落跡・遺物散布地10である。出土遺跡名は次のとおりである。

- (1) 駿東郡清水町矢崎遺跡 1点出土 長三角形 弥生時代中～後期 後藤守一1939
- (2) 駿東郡清水町根岸遺跡 1点出土 長三角形 弥生時代後期 中野国雄1953
- (3) 沼津市八兵衛洞遺跡 1点出土 長三角形 弥生時代後期 沼津市教育委員会1981
- (4) 沼津市豆生田遺跡 1点出土 長三角形 弥生時代後期 沼津市教育委員会1982
- (5) 沼津市御幸町遺跡 4点出土 長三角形 弥生時代後期 沼津市教育委員会1981
- (6) 清水市長崎I遺跡 1点出土 柳葉形 弥生時代後期 清水市教育委員会1978
- (7) 静岡市谷津山1号墳 28点出土 柳葉形・定角形 古墳時代前期 静岡県1935
- (8) 静岡市清水山古墳 1点出土 柳葉形 古墳時代後期 浜田耕作・梅原末治1923
- (9) 藤枝市時ヶ谷五鬼免1号墳 3点出土 柳葉形 古墳時代前期 静岡県考古学会1978
- (10) 藤枝市寺家山11号墳 1点出土 柳葉形 古墳時代後期 藤枝市1970
- (11) 島田市鳥羽美古墳 2点出土 柳葉形 静岡県考古学会1978
- (12) 島田市城山古墳 4点出土 柳葉形・定角形 古墳時代前期 大塚淑夫1981
- (13) 袋井市徳光遺跡 1点出土 三角形 弥生時代後期 静岡県教育委員会1968
- (14) 磐田市松林山古墳 80点出土 柳葉形・定角形 古墳時代前期 後藤守一他1939
- (15) 磐田市鶴子塚古墳 2点出土 古墳時代前期 磐田市教育委員会1976
- (16) 磐田市新豊院山D2号墳 28点出土 古墳時代前期 柴田稔1981
- (17) 浜松市椿野遺跡 1点出土 三角形 弥生時代後期 静岡県教育委員会1979
- (18) 浜松市伊場遺跡 1点出土 三角形 弥生時代後期 浜松市教育委員会1977
- (19) 浜北市赤門上古墳 30点出土 柳葉形・ノミ形 古墳時代前期 浜北市教育委員会1966
- (20) 浜北市蘿現平山7号墳 21点出土 定角形 古墳時代前期 浜北市教育委員会1975
- (21) 浜名郡雄踏町長者平遺跡 1点出土 後藤守一1939
- (22) 引佐郡引佐町馬場平古墳 3点出土 柳葉形 古墳時代前期 遠江考古学研究会1969

③ まとめ

銅鏡は、弥生時代より古墳時代にかけて認められる。これらは、集落跡と考えられる包含地出土のものと、古墳の副葬品として出土するものがある。このうち集落跡出土のものは、弥生時代後期～古墳時代前半にかけて認められている。静岡県内における集落跡出土の銅鏡は、弥生時代後期に属するものがす



第32図 静岡県内銅鏡分布図

べてで、いずれも本遺跡出土のものより失行すると思われる。形態的にみると、矢崎遺跡、根岸遺跡、御幸町遺跡、徳光遺跡出土のものは有茎の三角形鏡に含まれるものであろう。とくに徳光遺跡をのぞいた5遺跡出土のものは、細長く長味で長三角形といった呼称がふさわしいもので、縦一文字の鏡をもつものである。椿野遺跡、伊場遺跡出土のものは、有茎で三角形であるが逆刺をもつもので、縦一文字の鏡がみられる。これら集落跡出土の銅鏡はいずれも弥生時代的要素をもつもので、本遺跡出土の銅鏡とは形態からみて性格を異なることが推測できた。

また、銅鏡はその形態においてバラエティーに富んでいるが、その形態、量ともに増加するのは古墳時代に入ってからである。これはいうまでもなく、古墳出土の銅鏡が増加するからであり、静岡県内出土例をみても、出土総数217点のうち、203点が古墳出土のものが占めている。これらのほとんどのものが前期古墳から出土するものである。形態的にみても、柳葉形、定角形、ノミ形などが検出されているが、本遺跡出土の銅鏡に非常に類似するものがいくつか確認されている。時ヶ谷五鬼兔1号墳、城山古墳からの出土例などは同一形態のものと思われる。その他、谷津山1号墳清水山古墳、松林山古墳、赤門上古墳などの出土例も類似するものであろう。以上、本遺跡出土の銅鏡が、他の集落跡出土のものと違い、古墳出土のものと類似していることが知れた。これは、古墳と集落の年代観が一致するものと考えるならば、前期古墳との併行関係を示すものであるといえるのではないであろうか。

(渡井)

3. 駿河湾と相模湾の土器

はじめに

小地域における器種の型式の変化と様式の変遷の追求－地域編年の確立－が弥生時代後期から古墳時代初頭における土器研究の上で急務であることをわれわれは何度か述べてきた（富士宮市教育委員会 1981・加納俊介 1981）。現在、駿河湾東部地域の弥生時代後期の土器様式を把握できる遺跡が十分な数ではないが報告されており、弥生時代中期後葉の向原式土器群（小野真一他 1972）から古墳時代初頭の大席式土器（富士宮市教育委員会 1981）までの様式の変遷が明らかになった。この様式の変遷を基に相模湾岸及びその周辺地域と比較し、各々の地域の特徴を明らかにしたい。

比較の対象とする駿河湾東部に隣接する相模湾岸地域（酒匂川、相模川、引地川、境川流域）の器種の型式変化や土器群の様式の変遷を把握するための資料は藤沢市稻荷台地遺跡（藤沢市教育委員会 1966・1971）ら數例しかない。この状況を補うために神奈川県内の主な遺跡を加えたが、三浦半島・東京湾西岸・内陸地域など神奈川県内の弥生時代後期はいくつかの小地域に分かれることは明らかである（比田井克仁 1981）ことにより、われわれが目ざしている小地域の編年が確立した両地域の土器の型式変化、様式変遷の比較研究からすると好ましい方法ではない。したがって、駿河湾東部と比較した結果の相違点は大ざっぱで明確さに欠け、十分に比較の意義を表すことができないであろうことを先ず記しておく。

従来の南関東の弥生時代後期の土器研究は杉原氏の編年観に束縛されたため、実際には多くの地域色が存在するのだが、地域差をふまえて時間差を認識するまで十分に検討されなかった。その結果、各地域では土器群を久ヶ原式、弥生町式、前野町式といった型式に何とかあてはめようとしてきた。しかし、このような編年はすでに駿河湾岸の事例から破壊したことは前報文で述べたところである（富士宮市教育委員会 1981）。最近、このことを証明する従来の編年では把えがたい事実が明らかになった。神奈川県下では横須賀市鶴居上ノ台遺跡（横須賀市教育委員会 1981）である。この遺跡の壺は61%が口辺部に粘土帯を巡る台付壺で、この器種は従来の編年では大部分が久ヶ原式に包括されたものであるが、実際には五領式期まで伴出する。また、壺では久ヶ原式の特徴とされた山形文、幾何学文の土器と弥生町式の特徴であるS字結節文で文様を区画する土器が同時に存在する。報告者は上述のような上ノ台の土器群を「弥生町式土器はあっても弥生町式の時期は存在しなくなる」、「すべて久ヶ原式土器であり、その中に弥生町式、五領式土器がある」という具合に年代観が把握出来なくなる」として、住居跡の検討をもとにして、土器群の組み合せの変化を追求している。また、相関性は房総地方に深い関係を求め、三浦半島的な小地域圈が考えられると記している。

上の台遺跡の例で示したように南関東地方と一括して呼んできた文化圏は実はもっと小地域に設定でき、しかも従来の編年観は適用できないのである。久ヶ原式と弥生町式といった土器型式の相異は時間差とは言い切れないし、また、その様式の内容も問題となってきた。さらに現在までの報文は分布圏が異なる土器を同一地域のものと仮定し時間差の示標として把握され、地域差と時間差が混乱している可能性がある。今後、南関東地方の各地域ごとに土器型式、様式の変遷の追求に基

く編年の再編がなされる必要がある。

壺 B

複合口縁の壺で、駿河湾東部、相模湾岸、その周辺地域では壺のなかで客体的な位置を占める。駿河湾東部の壺B₁は全形を知り得るものはないが向原式の壺Bや他器種の壺から類推すると、細長くゆるやかにひろがる口頸部と最大径が下位にある無花果形の胴部をもつであろう。文様帶は口縁の複合口縁部外面と頸部～肩部外面にあり、前者は比較的狭く後者は幅広い。複合口縁部外面の文様は、羽状繩文に棒状浮文を加えたものが一般的で、目黒身遺跡第1排水溝（沼津市教育委員会 1970）、御幸町遺跡（沼津市教育委員会 1979）、神崎遺跡（静岡県教育委員会 1972）に出土している。また、同じ遺構より棒状浮文のみ施されている壺B₁も作出する。頸部～肩部外面の文様は神崎遺跡の羽状繩文4段の例の如く繩文、櫛描文を何段も施す。後続する壺B₂は窄まつ頸部からゆるやかにラッパ状にひろがる口縁部と下腹れか無花果形の胴部をもつ。文様帶は複合部と肩部の外面で、複合部はB₁より広がり、肩部は狭まって頸部にかからない。複合部の文様は繩文、櫛描文が消失して、棒状浮文、棒状沈文のみ施すのが普通である。肩部の文様は斜繩文に棒状浮文を加えたものが一般的であり、繩文の幅もB₁が数段に及ぶのに比し2段である。

相模湾岸及びその周辺地域においては壺B₂の好資料は見あたらないが、今後小地域の編年確立のため地域の器種、器類の把握に努力する必要がある。壺B₂の文様帶は複合部、肩部外面にある。複合部は羽状繩文、斜繩文が施され棒状浮文、沈文が加えられる。また、斜繩文のみでは中原上宿遺跡（中原上宿遺跡調査団 1981）、東台遺跡（小林行雄、杉原莊介 1968）に例がある。肩部の文様は斜繩文、羽状繩文をS字結節文で区画したものと山形文を組み合せたものが多く文様帶が胴部中、下半まで及ぶ例もある。ニッ池遺跡（杉原莊介、小林三郎、井上裕弘 1968）、東台遺跡である。また、幅広い文様帶は各文様の間に無文帶をもつ例も存在する。ニッ池、東台、浦島丘遺跡（小林行雄、杉原莊介 1968）である。参考までに挙げるが、続く壺B₃は厚木市戸室遺跡（杉山博久 1979）の例の如く、球形の胴部より稜をなすほど大きく屈曲して開く口縁部をもつ器形と思われる。口頸部高は低い。文様は複合部と肩部で、複合部に斜繩文と棒状浮文、肩部に3段の斜繩文を施す。

駿河湾東部と相模湾及びその周辺地域の相違は複合部の文様、頸部～胴部の文様帶と文様に現われている。すなわち、複合部は壺B₂の駿河湾東部では棒状浮文だけであるのに対し相模湾とその周辺地域では繩文を施す。日詰遺跡Y1方形周溝墓の例は伊豆ではあるが相模湾とその周辺地域の影響を受けたものと考えられる。頸部～肩部の文様帶は漸々と幅狭くなる傾向にあるのに対し、相模湾岸とその周辺地域ではその傾向は顕著でない。また文様も斜繩文の他に山形文、S字結節文などが多用されており、しかも各種の文様の間に無文帶をもつ。

壺 D

折返し口縁の壺で、両地域の壺の中では主体的位置を占める器種である。

壺D₁は細長くゆるやかにひろがる口頸部と最大径が下位にある無花果形の胴部をもち、口頸部が高い。

駿河湾東部では沼津市御幸町遺跡SD-11136号住居址（沼津市教育委員会 1979）、同じくIII21

号住居址（沼津市教育委員会 1981）、目黒身、神崎遺跡出土例がある。文様帶は口唇、口縁部内面、頸部～肩部外面であり、頸部～肩部の文様帶幅は広い。口唇部の文様は斜縞文に棒状浮文を加えた例が一般的であるが、136 住や目黒身遺跡第 1 排水溝の例のように棒状浮文だけ施すものもある。口縁内面の文様は口唇部に斜縞文をもつ土器に施されている例が多い。文様は 2 段の羽状縞文、斜縞文を施すが、模描波文もある。頸部～肩部の文様は羽状縞文を何段も重ねて施す。また、その上に棒状浮文を加える例も比較的多い。

相模湾とその周辺では歲勝土遺跡 Y 4 住居址（横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975）、新羽大竹遺跡 2 号住居址（神奈川県教育委員会 1980）に出土例がある。歲勝土遺跡の例では S 字結節文の間に無文帶をはさむ。これらに対して駿河湾東部では羽状縞文の繰り返しで文様を広くとっている例が圧倒的であり、S 字結節文の重ね合せる文様や頸部～肩部に存在する無文帶も見られない。

壺 D₂ はラッパ状にひらく口縁と無花果形胴部をもち、口頸部高は壺 D₁ に比べて相対的に低い。

駿河湾東部では月の輪上遺跡 B 地区溝 20（富士宮市教育委員会 1981）、同 C 地区溝 01（本報告参照）沼津市八兵衛洞遺跡 B₂ 住居址（沼津市教育委員会 1979）、二本松遺跡第 1 方形周溝墓（瀬川裕一郎、山内昭二、小野真一 1978）、日詰遺跡 Y 1 方形周溝墓、同大溝、神崎遺跡 2 号方形周溝墓、北神馬土手遺跡 2 号住居址（杉山治夫 1979）など後期の遺跡では大てい出土例がある。文様帶は折返し部外面、口縁部内面、肩部外面に存在する。折返し部は文様がないのがほとんどである、月の輪上遺跡 B 地区溝 20、二本松遺跡、神崎遺跡に棒状浮文、刻目をもつ例がある。日詰遺跡 Y 1 方形周溝墓大溝は前者の文様とは異なり、斜縞文をもち、折返し部も厚く幅広い。口縁内面の文様は羽状縞文が施される。肩部外面は羽状縞文に円形浮文を付加する文様が一般的であるが、日詰遺跡出土例には斜縞文、円形浮文のものが存在する。壺 D₂ の文様の中には二本松遺跡、月の輪上遺跡 B 地区溝 20、神崎遺跡の例の如く、櫛の刺突によって擬縞文を施すものが多くなる。

相模湾とその周辺地域では藤沢市御幣山遺跡 3 号住居址（寺田兼方、原信之 1968）、稻荷台地遺跡 M 2 号住居址（藤沢市教育委員会 1966）、中原上宿遺跡 IV 区 S 102 住居址、川崎市平風久保遺跡 2 号住居址（川崎市教育委員会 1977）、逗子市持田遺跡（逗子市教育委員会 1974）、横須賀市鶴居上ノ台遺跡 76 号住居址等に出土例がある。文様帶は折返し部外面、口縁部内面、頸部～肩部に存在し、折返し部は幅広いものが多い。口縁部外面（口唇部、折返し部外面）の文様は斜縞文、羽状縞文が普通だが、網目様燃糸文が施されるものもある。口縁部外面の文様は駿河湾東部の在り方と大きく異なるが、口縁部内面の文様は羽状縞文を施しており、駿河湾東部と同じである。

また、駿河湾東部の折返し部は薄く文様を施さないが、相模湾岸とその周辺地域では薄いが幅広い折返し部を造出し文様をもつ土器が一般的である。頸部～肩部の文様帶は D₂ に比べて狭くなったりが、駿河湾東部と比して幅広いもの多く、また無文帶が存在する例もある。文様は羽状縞文の施し、S 字結節文を伴うものがある。

壺 E

単純口縁の壺で、前述の壺 B、D に比べて口頸部形態がバラエティに富む器種である。

壺 E は窄った頸部よりゆるやかに聞く口縁と無花果形の胴部をもつ。

駿河湾東部では御幸町遺跡S D-1、目黒身遺跡第1排水溝より出土している。主様帶は頸部～肩部に存在する。文様は羽状縄文を数施す。相模湾とその周辺地域は好資料が見あたらないが、壺B、壺Dに準じると思われる。

壺E₂の器形は壺B₂、D₂に準じる。駿河湾東部では壺Dについて多数を占める器種である。文様帶は口唇、口縁部内面、肩部に存在する。口唇部は小さい棒状浮文、刻目を施す。口縁部内面は羽状縄文と円形浮文を施すが、日詰遺跡Y 1、Y 3方形周溝墓の例は斜縄文を施す。肩部は斜縄文、羽状縄文を施すが、月の輪上遺跡B地区溝20、月の輪上遺跡C地区溝01、日詰遺跡Y 1方形周溝墓の例は櫛による擬縄文が施される。

模模湾とその周辺地域では壺Dに比べ、壺E₂の量はかなり少ない。文様は肩部にあり、斜縄文、羽状縄文がある。駿河湾東部の文様に比較的よく見られる擬縄文は相模湾とその周辺地域ではあまり見られない。

台付壺Dについて

台付壺Dは単純口縁をもち、駿河湾東部、相模湾岸とその周辺地域で壺の主体である。両地域ともに見かけ上の特徴に乏しいこの器種の型式変化は把握できていないのが実情である。そこで、一応壺B、Dに対応させて台付壺を述べる。

駿河湾東部の壺B₁、D₂に伴出する台付壺Dは口縁部径が胴部最大径より大きく、胴最大径より頸部にかけてわずかに窄まる器形と口縁部径が胴部最大径より小さく、胴最大径より頸部にかけて大きく滴曲する器形がある。前者は御幸町遺跡136号住居址、目黒身遺跡第1排水溝に、後者は御幸町遺跡S D-1にある。両器形とも刷毛目調整がなされるが、口唇部の刻目は後者にはない。口縁部外縁に輪積み痕を残すものは容体だが両者に存在する。後者の中には頸部が粘土帯幅で垂直に立ち上がり、口縁が外反する形態のものも存在する。

相模湾岸とその周辺地域は好資料がない。

駿河湾東部の壺B₂、D₂に伴出する台付壺Dは前述の後者（無花果形胴部）の器形と球形の胴部をもつ器形がある。無花果形胴部の台付壺Dは月の輪上遺跡B地区溝20、同C地区溝01北神馬土手遺跡1号住居址に、球形胴部の台付壺Dは北神馬土手遺跡1、2号住居址に出土している。器面は両器形とも刷毛目調整であるが、月の輪上遺跡の壺は口唇部に刻目をもち、北神馬土手遺跡出土のものはともに刻目がない。無花果形胴部の台付壺Dの頸部はいづれも前述のような形態をなす。

相模湾とその周辺地域では壺の器種、調整方法に地域差がある。器種では横浜市上谷本第二遺跡B 1-20号住居址朝光寺原遺跡（岡本勇1968）の平底壺地域とその他の台付壺地域（内陸地域）である。相模湾岸では平塚市中原上宿遺跡、藤沢市福荷台地遺跡に刷毛目調整の台付壺Dが出土している。器形は球形のものと福荷台地遺跡M 1号住居址の中位胴部最大径まではほぼ垂直に立ち上がる胴部の器形がある。また中原上宿遺跡には頸部が立つ駿河湾東部と類似する例もある。口唇には刻目をもつのが多い。三浦半島は輪積み痕をもつ台付壺が主体だが（上の台遺跡に詳細な検討が加えられているのでその報文を参照されたい）。東京湾西岸（横浜市、川崎市）地域では好資料がないが、新羽大竹遺跡、平風久保遺跡井田伊勢台遺跡（川崎市教育委員会1977）・清水場遺跡（佐江戸

遺跡調査会1971）からすると刷毛目調の台付甕と輪積み甕を残す台付甕が混在するようだ。

最後に各土器群の様式について検討を加えるべきところであるが、相模湾とその周辺地域の資料の増加を願って次の機会にゆずる。

(鴻川)

4. 大廓式土器補考

(1) 大廓式土器(新)の器種構成

駿河湾地方東部の土器編年の改造に取り組むためには、まず相対年代の解っている若干の様式の内容をしっかりと把握することが必要である。つぎにそれらを基準として個々の器種・器形における型式の変化と同時期の器種構成たる様式の変遷とをあわせ追求しなければならない。

現在、われわれが基準となすべきもっとも確かな様式は、小型精製土器群を内に含む多数の一括遺物によってその実体を垣間見ることができる。古墳時代前期の大廓式土器である。ところがこの大廓式土器は実に多種多様な器種・器形によって構成されているのであって、個別の一括遺物、たとえば住居址の床面から出土した遺物にはそのうちのごく小部分だけが残されているといったことが多い。したがってそれをさらに細かくみる場合などには非常に大きな制約があることは否めない。こうしたとき、月の輪平遺跡において同時に存在した住居群の識別に成功し、個別の一括遺物を超えた時間的連続関係にある遺跡全体からの遺物を対象とすることができるのは、大廓式土器の検討を進める上で資するところが大きいといえる。そこで大廓式土器の新しい様相を示す典型的な事例として、その内容をあらためて記述しておくこととする。

月の輪平遺跡には19軒の被火災住居址があるが、このうちの15号、18号、22号、33号、62号、64号、103号、105号、110号、111号、122号の少なくとも11軒は、同時に類焼した可能性の高いものである。この他72号、76号の2軒もその可能性が指摘されているが（馬飼野1981）、重複関係・出土土器の点でなお不安がある。そこで後者を除く各住居址の出土土器を抽出すれば、次のとくである。

- 15 高杯A
- 18 台付甕A₄・壺D₃・小型高杯・小型丸底土器・小坩
- 20 台付甕一・小型器台
- 33 台付甕A₄・一甕D₂
- 62 台付甕A₄・壺A
- 64 一甕C₂・一甕D₂~D₃・壺E₃・小坩・小型土器
- 103 台付甕A₄・一甕D₁・壺A
- 105 台付甕A₄・壺D₃・坩・小型器台
- 110 台付甕A₄・台付甕一・壺D₃
- 111 杯

① 壺

S字状口縁の台付壺Aが14個体、折返し口縁の——壺Cが1個体、単純口縁の——壺Dが4個体あり、他に台付壺一が2個体ある。台付壺Aには完形品・完存品が多くみられるのに対して、——壺C・壺Dは6403以外すべて小破片である。

台付壺A 色調は黄褐色～橙褐色～茶褐色を呈し、胎土に細かな金雲母や長石・石英等を多く含み焼成良好な、良質の土器である。胴部の形状は肩の張りが弱い長球形～球形を呈するものが多い。調整も外側全体に特有の羽状ハケメをつける前に、少なくとも中位にヨコケズリを施すことが多い。外面上位の櫛描直線文の有無についていえば、有るもの=A₃類が1個体、無いもの=A₄類(前稿のA₅類を含む)が10個体で、後者が主体を占める。台付壺Aはすでにその型式変化の大筋が明らかにされており、したがってこれを指標として様式の細別を考えることも多い。たとえば、一括遺物中にA₂類があれば古段階、A₃類があれば中段階、A₄類があれば新段階、というわけである。ところが本遺跡においては、A₃類のみを出した110号がA₄類のみを出土した18号・33号・62号・103号・105号と、かつて同時に存在した住居群を構成していたのである。こうした事実からも明らかのように、S字状口縁台付壺の各類がよい具合に限られた段階にのみ存在したとは考えられないのであり、われわれは常に型式の変化と様式の変遷との間の微妙な関係に留意することが必要である。

——壺Cと——壺D 色調は黄褐色～橙褐色～茶褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含み、焼成のあまり良くない、粗質のものが多いが、6401は胎土に雲母を含み、焼成良好で、他と異質な特徴をもつ。——壺Dには小異があり、口縁端部の刻み目の有無、口頸部の形状によって、D₁～D₃の3類に分けられる。ただし口縁端部に刻み目を有するD₁類は小破片の10305一点のみであり、他の一括遺物の例ではいずれも平線で刻み目は消滅している。一括遺物には時期を異にしたものがたまたま共存している可能性もあるのであり、これをもって直ちに新段階まで口縁端部に刻み目を有するものが残るとはいえない。

② 壺

二段口縁の壺Aが3個体、折返し口縁の壺Dが2個体、単純口縁の壺Eが1個体あり、他に不明の1個体がある。

壺A いずれも、^ハ頭の3類に属し、色調茶褐色で胎土はきめ細かく、比較的良質な土器である。6203と6204は口縁端部と屈曲部の外側に斜位の刻み目を巡らす。類品は近畿地方から関東地方にかけて広く見られ、古段階から新段階まで存続する。一方10306は口縁部を短く斜め上方へ張り出し口縁端部内側を削って面とりする。下脇の胴部も含めて、その形態的特徴は東海地方西部で「柳ヶ岸型」と呼ばれているものに類似するといえるが、肝心の口縁部内外面の羽状・櫛描列点文や肩部外側の櫛描直線文・波状文をともに欠く点で疑問も残る。

壺Dと壺E 壺Eの6405は胎土・焼成とも良好で、他と異質の特徴をもつ。しかしこれ以外の3点は、本地域に特有の、色調が〈器表〉淡黄褐色～淡橙褐色・〈器壁〉淡青灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成のあまり良くない、粗質の土器である。しかも口縁部内面と肩部外側に斜繩文を主文様とする文様帶をもつことが注意される。少なくとも当地域では装飾性豊かな壺が新段階まで

残るといわなければならない。

③ 坩と高杯

それぞれ1個体づつある。ともに色調は黄褐色～橙褐色を呈し、胎土に雲母・石英等を少量含み焼成も良い、やや良質の土器である。東日本の東海系土器群の一つに、口縁端部内側を面とりする長頸壺・壺や高杯がある。高杯Aの1501は杯部が浅く直線的にひらき、口縁端部内側の面とりを欠く。しかしこうした有稜形高杯は古墳時代に新たな主要器種として登場するのであり、近畿地方などのものより東海地方西部のものと近似度大であることからみて、これに加えることができよう。

④ 小型精製土器群

小型高杯が1個体、小型器台が2個体、小型丸底土器が1個体、杯（前稿の小型鉢）が1個体ある。色調が暗黄褐色～暗橙褐色～茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好なものが多い。小型高杯は16号、45号でも台付壺A₄と共存している。一部の人たちの想定とは違って、小型高杯は小型器台と消長をともにするとみるべきであろう。単純口縁の杯11103は近畿地方に多い口縁部が二段に屈曲してひらく丸底のものと同一の器種に属すると思われる。類品が愛知県朝日遺跡群や長野県下蟹河原遺跡で同じ台付壺A₄と共存している。本遺跡の小型丸底土器はこの1808のタイプが主体を占め、11801のような近畿地方のものと近似度大といえる例は少ない。小型器台も同様に2212のタイプが主体を占め、近畿地方のものと近似度大といえる例は少ない。全国的に強い齊一性を示すとされる小型精製土器群にも地方差があるに違いない（高杯の例からみて東海地方西部との関連が注目される）。

⑤ 小型土器類

小壺が2個体、他の小型土器が2個体ある。しかし全形をうかがい知ることができるのは小壺の1809の1点のみである。

(2) 野中向原発見の土器

野中向原遺跡発見の土器は、富士宮市黒田1373番地の13 若林和司氏所有の宅地及び畑地内より、掘削及び耕作中に出土したものである。小型土器2、壺、台付壺、高杯、小型高杯各1の合計6点が出土している。小型土器2点は畑地内よりの出土で残りの4点は宅地内出土のものである。小型土器のうち1点は、三連壺形土器としてすでに紹介がなされている（植松章八 1979）。

小型土器（1・2）（1）は、台付壺Aを模した器体3個を、断面長円形の筒状粘土で連結して一つにし、その連結部内部に断面円形の孔を貫通させるという、特異な形態のものである。口径7.6cm、器高8.0cm、底径5.7cmを測る個々の器体は、台付壺Aと比べて脚台部が異常に大きく、胴部も無花果形と違って横長の長円形につくる。しかし調整はA₄類のそれを忠実に模している。色調は黄褐色を呈し、胎土には台付壺Aと同じく金雲母を含む微細な砂粒を多く混じえるが、器壁がやや厚く、焼成もややあまいのは、通常の台付壺と相違している。（2）は、口径6.5cm、器高2.5cm、底部2.9cmで、口縁部の内側を欠いている。口縁部が底部からやや内湾気味に外上方へひらいて、杯状をなす。外面はタテのミガキ、内面はナデで平滑に仕上げる。なお1個1単位で2カ所、対称位置に小孔を穿っている。色調は橙褐色、胎土に微細な砂粒を多く混じえる。

壺D（3） 口径18.4cm、現在高11.2cmの壺の口頸部で、口縁部の $\frac{1}{2}$ を欠いている。口縁部は、穿った頸部からゆるやかにラッパ状にひろがり、端部外面に幅1.5cmの薄手の粘土を重ねている。器肌が内外面とも荒れているが、口縁部外面の上半にタテのハケメ（9本／1cm）を施し、口縁部内面と肩部外面に斜繩文を巡らしたことが見てとれる。色調は〈器表〉淡黄褐色・〈器壁〉淡青灰色を呈する。胎土に細かな砂粒を多く混じえ、焼きのあまい、粗質の土器である。

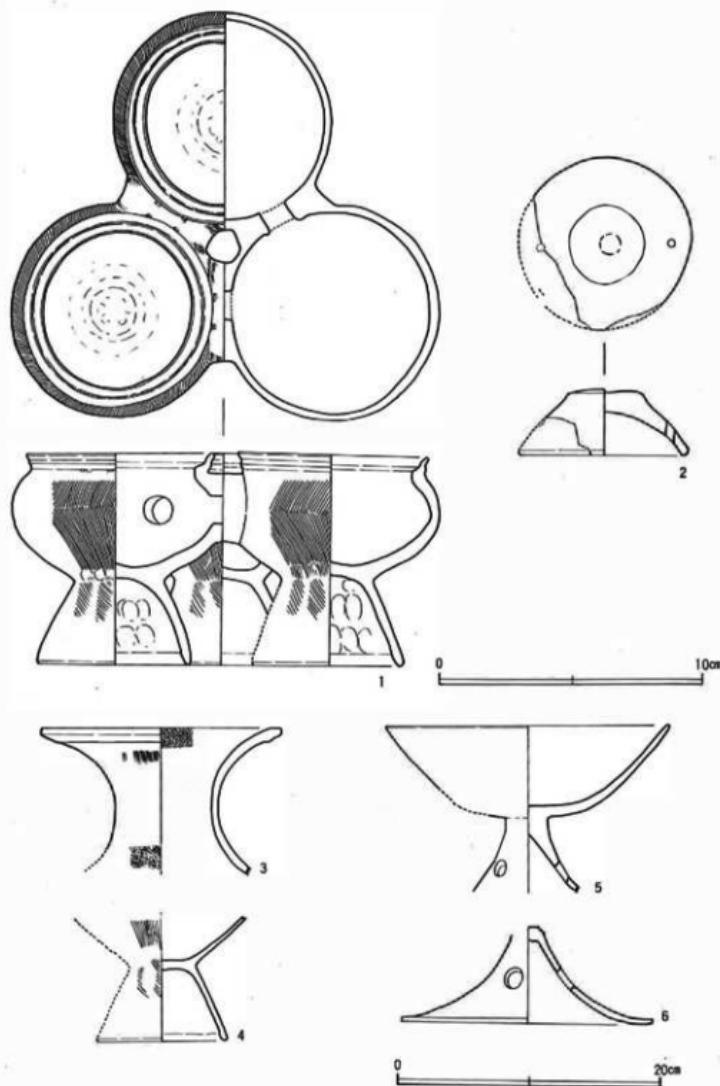
台付壺A（4） 現存高9.5cm、底径10.0cmの、内側に折返してある壺の脚台部で、胴部下半の大部分と脚台部の $\frac{1}{2}$ を欠いている。外面は、胴部にタテハケメ（6本／1cm）をつけた後、上半の一部と下半にナデを加えている。内面はともにナデで平滑にしているが、胴部と脚台部との接合部にオサエの痕を残している。色調は暗黄褐色～暗茶褐色、胎土精良（金雲母を含む）、焼成良好の良質な土器である。

高杯A（5） 口径21.8cm、現在高12.7cmで、杯部の一部と胸部下半のすべてを欠いている。杯部の浅い形態のもので、杯部の底部と口縁部との境界が強く屈折し、口縁部は直線的に外上方へひらく。脚部には3孔を穿つ。脚部内面はヨコのケズリ、杯部内面と外面全体は細かいミガキを入念に施す。（杯部内外面に纖維質の圧痕をとどめている）。色調は暗黄褐色～暗橙褐色、胎土はきめが細かいが、焼成は壺Dと同じくあまり良くない。

小型高杯（6） 現存高7.4cm、底径19.2cmの脚部のみで、3孔を有する。内面はヨコケズリの後、端部にヨコナデを加える。外面は粗いタテのミガキで調整している。色調は〈器表〉暗橙褐色・〈器壁〉淡青灰色を呈する。胎土はきめが細かいが、焼きがあまく、壺Dに類似する。

以上のような野中向原の土器は、後期弥生土器らしい（3）を除けば、大廓式土器（新）の範疇に入ることに異論があるまい。

（加納）



第33図 野中向原遺跡出土土器実測図

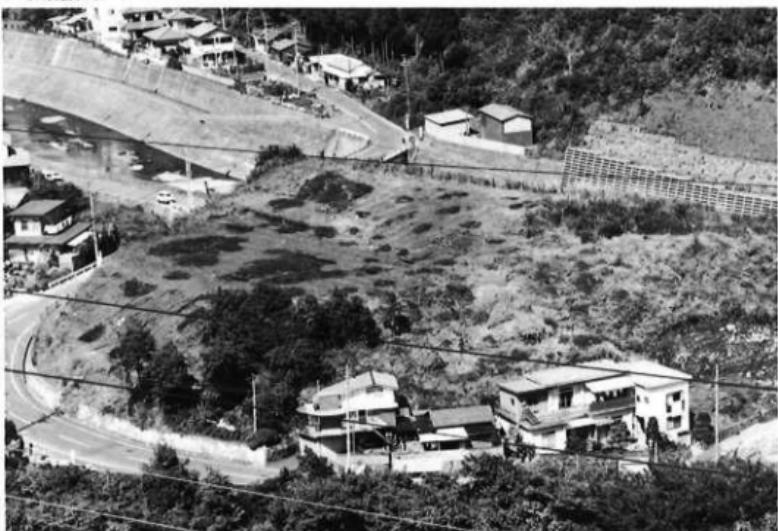
引用参考文献

- 磐田市教育委員会 1976 『磐田の古代史』
- 植松章八 1979 「土師器 三連變形土器・解説」(座右宝刊行会編『世界陶磁全集2』小学館)
- 大塚淑夫 1978 『島田市鳥羽美古墳』(静岡県考古学会シンポジウムI『静岡県における4~5世紀の墳墓について』)
- 大塚淑夫 1981 『城山古墳発掘調査(第三次)』概報
- 岡本勇 1968 『朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報』(横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書)
- 小野真一・秋本真澄・蔽下浩・原茂光 1972 『北伊豆函南町向原遺跡発掘調査報告』(駿豆考古13)
- 神奈川県教育委員会 1980 『新羽大竹遺跡』
- 加納俊介 1981 『駿河湾東部の弥生土器編年そのための覚書』(富士宮市教育委員会『月の輪遺跡遺跡群II』)
- 加納俊介 1981 『弥生土器研究のための覚書 比田井氏の論文に接して』(考古学基礎論3)
- 加納俊介・湯川悦夫 1972 『南関東出土の東海系土器とその問題』(小田原考古学研究会会報5)
- 加納俊介・湯川悦夫 1976 『古式土器の研究 I 東日本における様相を中心として』(小田原考古学研究会会報7)
- 加納俊介・湯川悦夫 1981 『月の輪遺跡群出土の土器』(富士宮市教育委員会『月の輪遺跡群』)
- 川崎市教育委員会 1977 『川崎市高津区平風久保遺跡発掘調査報告書・川崎市中原区井田伊勢台遺跡発掘調査報告書』(川崎市文化財調査報告書第V間)
- 木下正史 1978 『書評・権原考古学研究所編『纏向』』(考古学雑誌64-1)
- 後藤守一 1939 『日本上古時代の弓矢』(弓道講座)
- 小林行雄・杉原在介 1968 『弥生式土器集成本編2』
- 佐江戸遺跡調査会 1971 『清水場』
- 桜井市教育委員会 1976 『纏向』
- 佐原真 1976 『弥生土器』(日本の美術125)至文堂
- 静岡県教育委員会 1979 『静岡県遺跡地名表』
- 静岡県教育委員会 1935 『静岡県史I』
- 静岡県教育委員会 1972 『田方郡韭山町神崎遺跡緊急調査概報』(静岡県文化財調査報告書第11集)
- 柴田稔 1981 『磐田市新豊院山墳墓群の調査』(考古学ジャーナル191)
- 清水市教育委員会 1978 『清水市埋蔵文化財包蔵地台帳』
- 杉原在介・小林三郎・井上裕弘 1968 『神奈川県二ツ池遺跡における弥生時代後期の集落』(考古学集刊四一二)
- 杉山治夫 1979 『北神馬土手遺跡とその遺物』(沼津市歴史民俗資料館紀要3)

- 杉山博久 1979 「厚木市戸室出土の弥生式土器」(小田原考古学研究会会報第8号)
- 逗子市教育委員会 1974 「持田遺跡発掘調査報告」(逗子市文化財調査報告書第6集)
- 瀬川裕市郎・山内昭二・小野真一 1978 「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」(沼津市歴史民俗資料館紀要2)
- 寺田兼方・原信之 1968 「御幣山遺跡調査概報」(藤沢市教育委員会『藤沢市文化財調査報告書第4集』)
- 遠江考古学研究会 1969 「遠江のあけぼの展目録」
- 中野国雄 1953 「静岡県発見の銅鐵」(考古学雑誌第39巻第1号)
- 中原上宿遺跡調査団 1981 「中原上宿」
- 沼津市教育委員会 1970 「日黒身」
- 沼津市教育委員会 1979 「八兵衛洞遺跡群発掘調査概報」(沼津市文化財調査報告第16集)
- 沼津市教育委員会 1979 「御幸町遺跡第1次発掘調査概報」(沼津市文化財調査報告第17集)
- 沼津市教育委員会 1981 「御幸町遺跡第2次発掘調査概報」(沼津市文化財調査報告第25集)
- 沼津市教育委員会 1981 「八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書」(沼津市文化財調査報告第26集)
- 浜北市教育委員会・浜名高等学校 1966 「遠江赤門上古墳」
- 浜北市教育委員会 1975 「遠江内野古墳群」
- 浜田耕作・梅原末治 1923 「日本発見銅劍鉢及銅鐵聚成図録」(京都帝国大学文学部考古学研究報告第7冊)
- 浜松市教育委員会 1977 「伊場遺跡遺構編」
- 比田井克仁 1981 「古墳出現前段階の模相について」(考古学基礎論3)
- 平野吾郎他 1968 「徳光遺跡発掘調査概報」(静岡県教育委員会『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』)
- 藤枝市 1970 「藤枝市誌」
- 藤沢市教育委員会 1966 「福荷台地遺跡調査概報」(藤沢市文化財調査報告書第2集)
- 藤沢市教育委員会 1971 「福荷台地遺跡調査概報(2)」(藤沢市文化財調査報告書第7集)
- 富士宮市教育委員会 1981 「月の輪遺跡群」(富士宮市文化財調査報告書第1集)
- 富士宮市教育委員会 1981 「月の輪遺跡群II -月の輪上遺跡(B地区)-」(富士宮市文化財調査報告書第2集)
- 八木勝行 1978 「藤枝市五鬼免1・2号墳」(静岡県考古学会シンポジウム1『静岡県における4~5世紀の墳墓について』)
- 横須賀市教育委員会 1981 「鶴居上の台遺跡」(横須賀市文化財調査報告書第8集)
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975 「歳勝土遺跡」(港北ニュータウン地域埋蔵文化財調査報告V)

図 版

図版第1



A. 調査前景



B. 調査全景

図版第2



A. 斜面上全景



B. 斜面下全景

図版第3

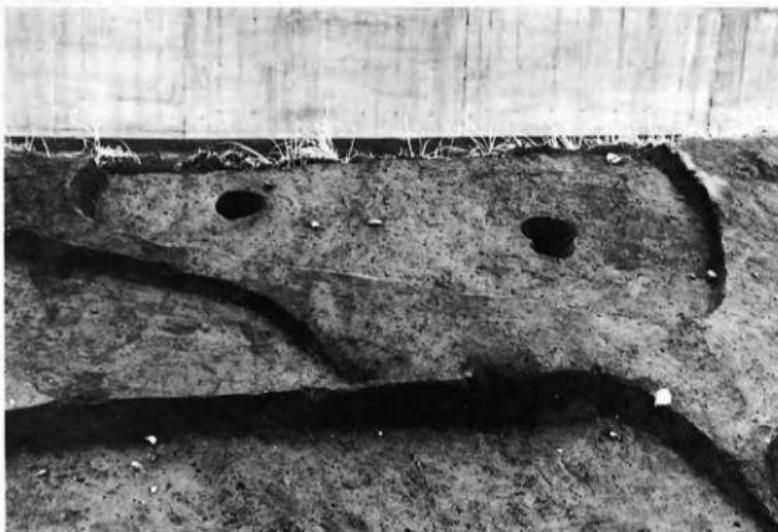


A. 第101号住居跡床面



B. 第101号住居跡掘り方

図版第4



A. 第102号住居跡掘り方



B. 第103・104号住居跡床面

図版第5



A. 第103・104号住居跡掘り方



B. 第105号住居跡

図版第6



A. 第106号住居跡



B. 第105・106・130号住居跡掘り方

図版第7



A. 第107号住居跡床面



B. 第107号住居跡掘り方

図版第8



A. 第108・109号住居跡床面



B. 第108号住居跡掘り方

図版第9



A. 第110号住居跡床面



B. 第110号住居跡掘り方

図版第10



A. 第111号住居跡焼土堆積状況



B. 第111号住居跡掘り方

図版第11



A. 第112号住居跡焼土堆積状況



B. 第113号住居跡掘り方

図版第12



A. 第114号住居跡掘り方



B. 第115号住居跡内石組

図版第13



A. 第115号住居跡床面

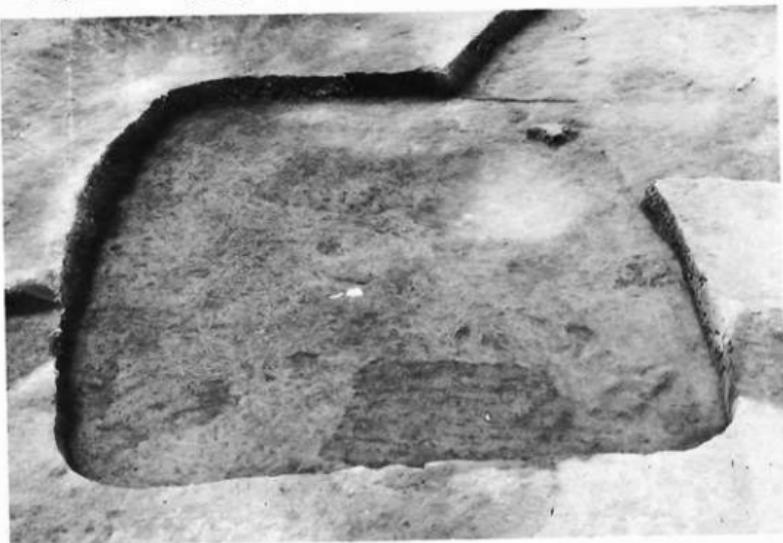


B. 第116号住居跡床面

図版第14



A. 第116・128号住居跡掘り方



B. 第119号住居跡床面

図版第15



A. 第120号住居跡掘り方



B. 121号住居跡掘り方

図版第16



A. 第122号住居跡床面



B. 第122号住居跡掘り方

図版第17



A. 第123号住居跡床面



B. 第123号住居跡ピット内土器出土状況

図版第18



A. 第124号住居跡掘り方



B. 第125号住居跡床面

図版第19



A. 第125号住居跡掘り方



B. 第126号住居跡床面

図版第20



A. 第126号住居跡掘り方

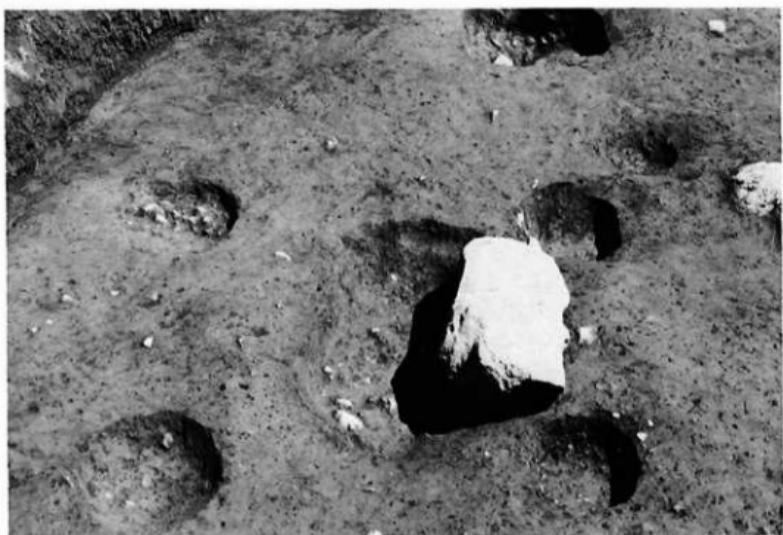


B. 第127号住居跡床面

図版第21

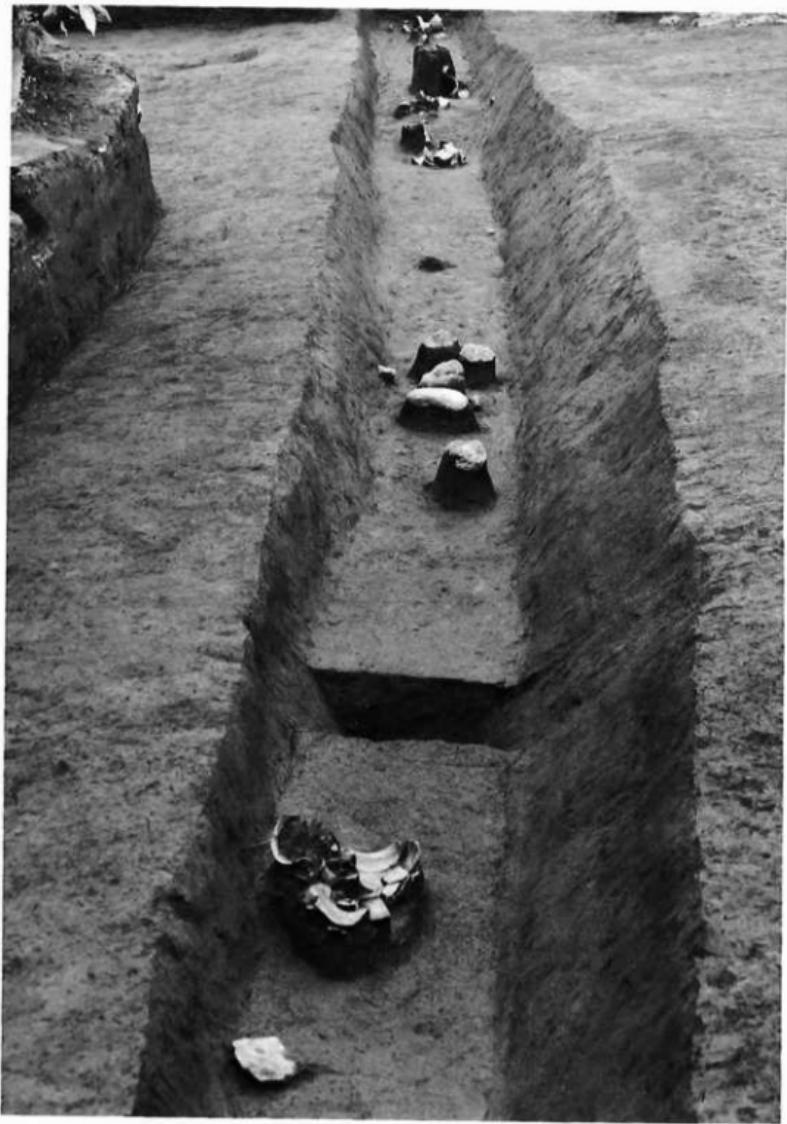


A. 第129号住居跡床面



B. ピット状遺構群

図版第22



月の輪上遺跡C地区溝状遺構01 遺物出土状況

図版第23



A. 月の輪上遺跡C地区溝状遺構01出土土器



B. 月の輪上遺跡C地区溝状遺構01出土土器

図版第24 出土土器 (1)



10104



10107



10108



1031



10109



10306



10302



10403



10404



10303



10501



10502

図版第25 出土土器 (2)



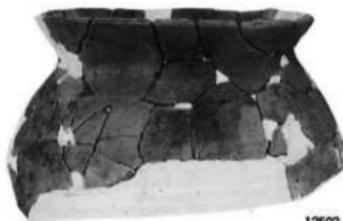
図版第26 出土土器 (3)



図版第27 出土土器 (4)



12506

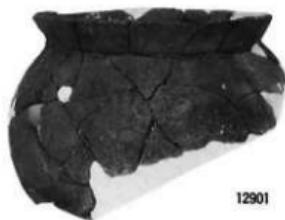


12502

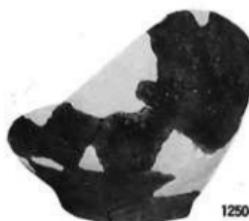
12301



0005



12901



12504



0004



0001



12902



0003



0006



0010



0007



0008



0017

図版第28 出土土器 (5)



図版第29



A. 繩文時代石器、及び古墳時代遺物



B. 野中向原遺跡出土土器

月の輪遺跡群 III

一月の輪平遺跡（第6次調査）—

一月の輪上遺跡（C地区）—

昭和57年3月31日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

印刷 篠原印刷